324
1
59

始

重刊の辭

一卷、二百六十二字、悉くこれ菩薩深般若の應現にして、心魔降伏の祕訣。悟境遠きにあらず、之れを體讀する中にあり。予丁未の年、篤信の士の請に應じて之れを講述し、其後、版、絶えて江湖に忘れられたりしが、今又二三子の慫慂によつて之れを刊し、新に降魔表講話を付す。經は理を示して玄を闡く觀音の說法、表は喩を示して幽を窮むる祖師の靈筆、彼れ、此れによつて明かに、此れ、彼れによつて趣を添ふ。共に薩埵の妙機妙用、二鏡相照らして心内の暗を破らば、說

大正
3. 5. 28
内交

述の微志も亦達するを得んか。婆說例によつて紛々、兒を憐んで醜を忘るゝの痴態、今歳還た去歳に過ぎたり。甲寅四月落花繽紛として下る代々木の村莊に

咄堂識

序

柳を描いて風を顯はし蝶を寫して香を示すは畫家の妙技に屬すといへども、風は終に描く能はず、香は固より筆に上らず、般若心經、僅に是れ二百六十二字、しかも玄を語りて宇宙の神秘に入り、妙を說ては人心の奥底を盡くす、予今之れを釋するに四萬有餘字を費し冗舌多辯婆說紛々たるも畢竟敲門の瓦子、標月の指頭に過ぎずして其究極する所に至ては予も亦摸索する能はず、自ら摸索する能はずして之れを揣摩す、所謂一盲、衆盲を率くの譏なきにあらずといへども理を究め玄を盡くさんとするの至心に至ては敢て他に讓らず、讀者若し之れによりて、般若の微光を認め心眼を開く

の素地を得たまはゞ、予の冗舌多辯も亦無用の業たるに了らざるべし。

丁未初冬　　咄堂居士識

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。是故空中無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界乃至無意識界。無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智亦無得。以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顚倒夢想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。故知般

若波羅蜜多。是大神呪。是大明呪。是無上呪。是無等等呪。能除一切苦。眞實不虛。故說般若波羅蜜多呪

即說呪曰

揭諦。揭諦。波羅揭諦。波羅僧揭諦。菩提娑婆訶。

凡例

一般若心經は殆んど佛教各宗の共用する所の經典で、僅かな文字の中に各宗の教理を說き盡くしたのでありますから古來多くの註釋書があるのでありますが、其二三を除ては多く專門に流れて何人にも解せしめるといふことは出來ませぬで、自ら不學淺才を顧みず古人や先輩の註釋を力に成るべく解し易く其大意を述べたのでありました。

一佛教各宗各其宗の立脚地から此心經を解するので甲說と乙說と其旨を異にするものが少くありませんが、私は通佛教の見地の上から何れも一方に偏せず、主として賢首大師の略疏や、玄門和尙の講錄、蘭溪禪師の註心經、天桂禪師の止啼錢等によつて講述した

のです。

一詩歌や逸話を引用したり西洋學説などを對照したのは通俗に解し易からんが爲めの婆心に過ぎませぬ、讀者請ふ徒らに喃々するものと見ず、更らに考量一番して此心經の妙理を日常に應用せらるゝあらば功德無量なるものがありませう。

一本書は佛教篤信者某氏の需に應じて講述したもので要は佛教弘通の一端たらしむるに外なりませぬ。

一本書の題畫は大内青巒居士が殊に本書の爲めに揮毫せられたもので表紙の模樣は天台山所藏印刻心經を模したのです。

明治四十年十二月　講述者識

目次

一　序説……一
心經の價値……譌譯の種類……註釋書……心讀……羅什……玄奘……譯經の因緣……異譯……各宗の教理と心理

二　經題……一〇
五種不譌……摩訶般若……實相般若……觀照般若……文字般若……波羅蜜多……小乘と大乘……六波羅蜜……般若は目なり……他力淨土と般若……心經……心の字……經とは何ぞ……自己の心

三　綱要……二一
觀自在菩薩……觀世音……觀自在の義……十種の自在……觀自在と吾人……宇宙の靈體……靈覺……菩薩とは何ぞ……行深般若波羅蜜多時……人空般若……四大……五蘊……法空般若……照見五蘊皆空……照見……皆空

……四大元無主……其事例……度一切苦厄……四苦八苦……分段生死……變易生死……平生の用心……煩惱障……所知障

四　實　義（上）……三九

舍利子……對告衆……舍利子の事……色不異空、空不異色、色卽是空、空卽是色……因緣生……般若の偈……天台の三諦……眞空妙有……平等卽差別……宇宙觀の三要……色と空……禪家の解釋……受想行識交復如是……主觀と客觀……八識……心境俱不……四料簡……現象卽實在

五　實　義（下）……五四

舍利子、是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減……相對と絶對……八不中道……凡夫と菩薩と佛果……三性……是故、空中無色、無受想行識……意識の解……阿賴耶識と眞如……心理學の分類……無眼耳鼻舌身意、無色香味觸法……扶塵根……勝義根……六根六境……無眼界乃至無意識界……十八界……五位……無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡……十二因緣……業感緣起……無明の實性……生死と涅槃……無苦集滅道……聲聞と緣覺……苦集二諦……見惑と思惑……五逆十惡……六道輪廻……八正道……無智亦無得……純清絶點

六　得　益……七九

以無所得故……大所對……空手還鄉……菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙……無罣礙……心は虛空の如し……無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顚倒夢想……四魔　四顚倒……心內無物……劍術の極意……究竟涅槃……涅槃の語義……三德……三涅槃……三世諸佛、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提……佛……無上正等覺……般若の一門……故知般若波羅蜜多、是大神咒、是大明咒、是無上咒、是無等等咒……陀羅尼……咒の四德……能除一切苦、眞實不虛……理と信、

七　秘　密……九四

顯了般若と秘密般若……秘密の德……故說般若波羅蜜多咒……卽說咒

曰揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶……呪文不譯の理由……
呪文の意義……去劍刻舟……顯と密……擱筆
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
通俗降魔表講話……一
魔の字義……三乘……本來本法性……眞如……塵勞……六度……人空法空
……魔軍偵察……味方の軍容……戰略……突貫……魔軍敗北……戰捷

通俗心經講話

加藤咄堂述

一　序說

心經の價値

佛敎の御經の數は五千餘卷の多きに達するのでありますが、其中で最も短くして能く精要を盡くして居るのは此心經の一卷に過ぎないのであります。一般に心經と云ふて居りますが、詳しくは摩訶般若波羅蜜多心經といふて本文は僅に二百六十二字しかありませぬが、其說く所は甚深高遠、幽を闡き玄を探り、宇宙の最高原理、人生の始終を說き、佛敎の根本義を示したのであるから、華嚴宗の祖と云はるゝ支那の賢首大師は此經を以て「昏衢を曜すの高炬、苦海を濟るの迅航なり、物を拯ひ迷を導く斯より最たるはなし。」といふて、煩惱の暗黑を照らすの火、苦みの海を

渡るの船だといはれ、天台の玄門和尚は「此經は顯密並べ說き、而も圓頓の妙理を宣べ盡したまへる誠に至簡至要の經なり」といひ、眞言の弘法大師は此經を以て「卽ち是れ大般若菩薩の大心、眞言三摩地法門なり」として激賞し、天桂禪師は

此經は大部六百卷の精要を該て如來一代時敎も此經に蘊攝せずといふことなし、いはゆる此經とは唯だ二百餘言の文字を指すのみにあらず、五蘊十二處十八界の諸法及び十方世界、日月星辰、山河大地皆な是れ炳然たる此經の聲名句文なり、これ先佛の所說にもあらず、諸祖の提唱にもあらず、卽ち是れ人々本有一卷の心經なりと知るべし

といひて以心傳心の禪の要も此一卷に攝め盡くすと示されてある。斯くの如く古來から支那日本を通じて持て囃されたものであるから其飜譯にも幾通りもあつて、唐の玄宗時代に調べた「開元釋敎錄」は十一通りもあるといふことであるが、多くは傳はらず其中今日に遺つて居るといふのでも五通りある。

飜譯の種類

一　摩訶般若波羅蜜多心經　　唐玄奘三藏譯
二　同　　唐般若利言三藏譯
三　摩訶般若波羅蜜大明咒經　　秦羅什三藏譯
四　普遍智藏般若波羅蜜多心經　　唐法月三藏譯
五　佛說聖母般若波羅蜜多心經　　宋施護三藏譯

此外に唐菩提流支の般若波羅蜜那經、同じく義淨三藏の般若波羅蜜多心經の二つは今存せないので、仲希の顯正記にはこれを五存二缺といふて五つは存して二つは缺けたといふてある、(此外に智慧輪、支謙、實叉難陀、不空の四師の飜譯を加へて十一通りとある)如く飜譯も多いが、其中最も行はれて居るのは玄奘三藏の飜譯で、私のこゝに講ぜんとするのも此玄奘三藏の飜譯に依るのであります。

飜譯でさへ幾通りもあるほどであるから其註解や講義の類は汗牛充棟も啻ならずで、中に就く賢首大師の「略疏」慈恩大師の「幽贊」弘法大師の「秘鍵」などは各自己の立脚地によりて此經を解釋せられたので、道隆蘭溪禪師の

心で讀む

「註心經」は禪宗の見地を以て提唱せられ、盤珪禪師の「心經抄」、天桂禪師の「止啼錢」玄門和尚の「講錄」德門上人の「探要抄」十阿上人の「略諺註」などは假名かきで解し易いので、近い所では大內青巒居士の書かれた「心經講要」といふのがあります、私は今これらの諸書を參考し往〻愚見を加へて此至簡至要の御經の御話をしやうとするのであります。固より不學淺才で此甚深高遠な敎理を充分に御解りになるやうに話すことは出來ますまいが、私の講話は氷のやうに冷かなものでも、之を諸君の胸中の火に暖めて解かして下されば此經の大要を窺ふことが出來るであらうと思ひますので、唯だ耳で聽かずに心で聽き、目で讀まずに心で讀むといふやうに心掛けていたゞきたいものであります。さて其次ぎに此心といふものは何ぞと參究せられたならば二百六十二字の本文の中に甚深幽遠の妙あるを悟ることが出來ませう。

前きにもいふた通り今こゝで講義をするのは玄奘三藏の飜譯によるのであります、元來般若諸部の經典を支那へ傳へたのは鳩摩羅什三藏でも

羅什

玄奘

とは西域龜茲國の人、西域といふのは今の天山南路あたりの國々を指したのである、羅什幼にして出家し遍く諸方を歷遊し、後、支那に來りて後秦二代の主姚興の崇信を受け朝廷の西明閣及び逍遙園を以て飜譯場として盛んに佛典の飜譯に從事した、其譯經の主要なるものは般若部に關する經典で、此心經も其時に初めて譯されたのである。之を舊譯といふ、其後唐の玄奘三藏が志を立てゝ梵本を印度に求めんとし、太宗の貞觀三年、表を上つて之れを請ふたが、皇帝其才を惜みて遠く危險の地に赴くを許されなかつたから陰かに旅人の間に紛れて國境を逃れ出で千辛萬苦西域諸國を經て中央亞細亞に入り、或は雲霧の爲めに路を失ひ、或は虎豹の爲めに其身を苦められ終に北印度に入り、巡遊すること十有四年、貞觀十七年十二月印度の國境を出で復び中央亞細亞にかゝり支那の都たる長安に還つたのは同十九年四月で、出立より歸京まで前後十六年の大旅行、かくて巨象に載せて齎らし歸たのは五百二十夾六百五十五部の梵本であつた、(これは實に支那歷史上の大事實で其旅行の詳細な事は「大唐

譯經の因緣

西域記」にある、）唐の大宗大に之れに歸依し先づ西京の弘福寺を以て之が飜譯場とし次で貞觀の二十二年には北闕紫微殿の西に弘法院を營み玄奘をして此に居らしめ、皇太子（高宗）が大慈恩寺を造らるゝに當ては別に譯經院を建てゝ譯場に充て、一切の費用は朝廷から給せられて盛んに飜譯を企てたので、其大般若經を譯するに當ては玉華宮を寺として之に與へられたといふほどで歸來二十年、玄奘の譯した者は七十五部一千三百三十五卷の多きに達したといふことである、此心經も亦實に其時に譯されたのである、傳る所によると此心經は玄奘が渡天の途中罽賓國を過ぎた時に道には虎豹あり雲霧は四方を塞ぎ進むに進み難く、とある貧寺を認めて一夜の宿を求められしに、寺中に老僧の瘡痍身に滿ち膿血衣を染めて獨り榻上に臥するあり、異臭紛々、鬼氣人を襲ふ、玄奘其病を愍み、食を進め衣を洗ひ看護懇切を極められしに老僧至誠に感じ、口づから此心經を授けた、玄奘は日々之を口に誦して恙なく印度に入り此老僧の口授せし梵本をも併せ得、貞觀二十二年九月二十四日之を飜譯したといふ

異譯

ことで卽ち神僧口授の梵本だといふ、想ふに心經の梵本にもいろ〳〵あつて飜譯も前にいふ通り幾通りもあるに至たので今玄奘の譯したのは梵本に於ても勝れたものであるからかゝる傳說と共に最も廣く世に行はるるに至たのであらうと思はれます。

試に現存五譯の中を比較して見ると、羅什の譯と玄奘の譯とは大差なく、唯だ羅什のは題を摩訶般若波羅蜜大明咒經と名けたるの外二三文字の異れるあるのみであるが、他の三譯の中、法月や般若の譯の如きは初めに凡ての佛經にある如く序分といふべき、

如是我聞、一時佛在王舍城魯闍崛山中　與大比丘衆百千人俱　菩薩七萬七千人俱　其名曰觀世音菩薩、文殊師利菩薩、彌勒菩薩、而爲上首、皆得三昧總持、住不思議解脫　爾時觀世音菩薩、在彼衆中卽從座起合掌向佛瞻仰尊顏　目不暫捨　白佛言　世尊、我欲於此衆中宣說諸菩薩普遍智藏般若波羅蜜多心、唯願世尊聽我所說　爾時世尊以梵音告觀世音菩薩言　善哉々々　具大悲者、聽汝宣說與諸衆生云々　（法月所譯）

とありて本文に入り、本文にも異譯多く、終りに

佛說是意已　與諸比丘及菩薩衆　一切世間天人、阿修羅、乾闥婆等聞佛所說、皆大觀喜信受奉行（同上）

とある、これは或は飜譯の相違ばかりでなく梵本卽ち原書に或は幾通りもあつたのではなからうかと思はれます、併しこれらの詮索は今は用はないので、唯だ飜譯がいろ〳〵ある中で獨り玄奘のゝみが行はれるのは梵本（原書）もよく譯もよいからであると知つて居ればそれでよいのである。さてこゝに一ついふて置かねばならぬことは、元來般若部といふのは佛敎全體の上では、あまり上等に位するものでなく、天台大師が釋尊一代の說法を五時に分たれたのによつて見ると

第一　華嚴の時（實大乘）
第二　阿含の時（小　乘）
第三　方等の時（大小二乘に渡る）
第四　般若の時（權大乘）

第五　法華涅槃の時（實大乘）

といふやうに見ることが出來る、然らば此般若心經も權大乘に屬すべきもので、まだ實大乘の眞趣を示して居るものではないのかといふに般若諸部の御經は唯だ空を旨として眞空妙有の實義には至らぬのであるが、此心經は權大乘を出でゝ華嚴法華の域に入り、大乘の極意たる佛敎甚深の理を示したものであると見ることが出來る、殊に弘法大師の秘鍵などによつて考へると此經を五段に分ちて、觀自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄までを人法總通分とし、其次ぎを分別諸乘分として佛敎各宗悉く此中に含まれたりとの意にて舍利子、色不異空、空不異色、色卽是空、空卽是色、受想行識、亦復如是の一段はこれ華嚴宗の敎旨を示すものにして、舍利子是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不增不減とあるは三論宗、是故空中無色、無受想行識無眼耳鼻舌身意、無色香味聲味觸法、無眼界乃至無意識界とあるは法相宗、無無明、亦無無明盡、乃至無老死、亦無老死盡とあるは緣覺、無苦集滅道とあるは聲聞

で共に小乘、無智亦無得、以無所得故とあるは法華天台の義であるとし、次ぎの菩提薩埵以下阿耨多羅三藐三菩提までを行人得益分、故知から故說般若波羅蜜多呪までを總歸持明分とし、最後の呪文を秘密眞言分として此經の中に大小乘顯密一切の敎義をも含むものとせられてある、是等のことはいづれ後ち〳〵に說きますが是等の分類を見るも此二百六十二字の短い御經の中に八萬四千の法門、五千七百の經卷を收め八宗九宗の根本となるべき深い道理が存して居ることが解りませう、先づ大體の御話はこれ位にして、これから一々本文によつて御話をすることにしよう。

二　經題

先づ初めに標題の

摩訶般若波羅蜜多心經

と云ふ十字から講ぜねばならぬ、此十字の中上の八字は梵語で下の二字

が漢語、卽ち梵語と漢語とを兼ね擧げて一部の經題を成して居るので之れを梵漢兼擧といひ佛敎の語には此類が澤山あります、さて何故初めの八字を梵語のまゝにして譯さなかつたのかといふに、梵本卽ち印度の經典を支那に譯すに就て「五種不飜」といふて五種のものは譯せずに原語をその儘に傳へるといふことになつて居る、其五といふは第一秘密の故に譯せずといふて眞言秘密の陀羅尼のやうにアビラウンケンとかナムカラタンノーとかいふのは原語のまゝに保存してある、第二に多義を含むが故に譯せずといふて一語の上にいろ〳〵な多くの意味を含んで居るのは譯さない、それは譯しても其意味を正しく傳へることが出來ないからである、第三は此地にないものゝ名は譯せぬランプを日本語に譯して行燈といへば却て其意味を損じ、パンといふのを麵麭とは譯してはあるが矢張パンといふ方が通ずるやうに一方にあつて他方にないものは譯せない方が便利である、第四は古風を損ずるが爲に譯せずで、第五は譯さゞるを以て利多とするものは譯さない、といふのだ、ステーションはステーシ

ョンの方が解し易く却て停車場と譯した方が解し難いやうな例はあることである。今茲に摩訶般若波羅蜜多と原語のまゝを擧げたのも此不飜の中に屬するからで摩訶といふのは多義を存すで、これには大と多と勝との三義を含んで居るから大といへば多と勝との義が缺け、多といひ勝といふても缺けるから敢て譯せずに原語のまゝ摩訶と使つたので此三義の中大といふのが意味が最も近いで常に摩訶般若を大般若といふて居る。

摩訶般若

次ぎの般若(Pradjna)といふ語は之れは譯さない方を利多しとしたので、強て譯すれば知慧といふことになるが、知慧といふたのでは世間の知慧と同じやうに思はれるで矢張原語のまゝ般若としたので、智慧は智慧だが佛敎の悟を開いた上の智慧であるから世間でいふ智慧とは其趣が違ふ、賢首大師の略疏には此般若を三通りに說いてある、一を實相般若といひ、二を觀照般若といひ、三を文字般若といふ、之を智慧の二字に當て箝めると實相般若は智である、卽ち愚癡を離れ妄想を去つて宇宙の當體、天地の狀態をありのまゝに見るので、雀のチュウ〳〵、烏のカア〳〵、柳

實相般若

の綠なる花の紅なる山の高く聳ゆる水の長く流るゝ今も昔も變りなき宇宙の實相で、重きものゝ必ず地に落下し、輕きものゝ空に浮ぶといふのは東西南北いづれの所へ往つても行はるゝ天地の眞理で時の古今を問はず地の東西を論ぜず、眞理といふものに變りのあるべきではない、印度の眞理、支那の眞理などゝ眞理に違ひがあつては未だ眞理といふことが出來ない、卽ち實相般若の理は脫白露現に少しの隱すことなくありのまゝに現はれたる宇宙の眞理で、無限の空間に亙り無限の時間を貫く所の大智慧光明である、さて次ぎの觀照般若といふは觀は見る、照は照らすで、之れを鏡に譬ふれば實相般若は鏡の體で、これに森羅萬象さま〴〵の姿の映つて行くのは此觀照般若で智の働き卽ち慧の字に當る、それであるから註心經には、

觀照般若

般若は梵語此には智慧といふ、諸の境界を逐て、心眞に背くが故に無我を知らず、我は卽ち愚癡の全體なり、愚癡を離るゝを智といひ、其方便あるを慧といふ、智は慧の體、慧は智の用なり、衆生本來具足す、

三世の諸佛、歴代の祖師、天下の老和尚、之れによりて妙用を施し、神通を現じ、喝を下し棒を行ず、眞の般若は文字に非ず、蠢動含靈本來の眞性なり、

とある、われ〳〵の心が若し實相般若の如く一點の曇もなく亦觀照般若の德を具へて映るがまゝに映して行くことが出來れば立派な者であるが、好いにつけては執着の心を起し、惡いにつけては瞋恚の念を生じ、濁り濁つて實相般若の明を掩ひ、觀照般若の德を全くすることが出來なくなるので、其源は我見我執の心からだ、心に此執着なくんば花來れば花が映り、鳥來れば鳥が映つて心の鏡は少しも汚れる者ではないかくてこそ眞に大智慧光明の人といふ事が出來るのであるが、悲哉、迷ひに迷ふて此實相の德を顯す事が出來ず、心は境界の爲めに動かされて愚癡妄想の爲めにかき亂され、此肝心の鏡が曇つて居るものであるから映るべきものが映らず、よく映つても曲たりくねつたりするのである等しくこれ月で、別に好惡愛憎のあるべきではないが、西行法師が出家をする前には

なげけとて月やは物を思はする
かこち顔なる我が涙かな

と見たが、其後修養が積んでは、

雲にたゞ今宵の月をまかせてん
いとふとしても晴れぬものゆへ

と塵境の外に超絶することが出來た如く、心に我執なく妄想なくんば森羅萬象は何の隱くす所なくあり〳〵と我が心に映るのであります。

かゝる此般若の道理を文字に示したのが第三の文字般若で、總じては一切經五千餘卷の文字、別していへば大は六百卷の大般若經より小は二百六十二字の此心經に至るまで悉く此智慧を詮表するものであるから之れを文字般若といふのであります、般若にはかく三通りの區別があるが實はこれわれ〳〵衆生の一心に具するので、別に他に求むべきではない、即ち實相般若は宇宙の眞理で觀照般若はそれによりて得られたる智慧、文字般若は之れを詮表するものである、さて此文字によりて觀照の智慧

を得、其智慧によつて實相の理を證するのであるから此三は三にして卽ち一、一にして卽ち三、われ〳〵が我見我執を打破するの時、こゝに三世十方に亙る般若の光明は現はれるのであります。

波羅蜜多

次ぎに波羅蜜多とは到彼岸と譯して吾々凡夫は迷ひの此岸に居る、此迷の岸から煩惱の流れを渡つて悟の彼の岸に到ることで度の義ありといふ、度は渡守が舟を此方の岸から彼方の岸に渡すやうに迷ひの衆生を悟の彼の岸に渡すのでこれが大乘菩薩の行ひでなければならぬ、一體佛敎には小乘と大乘とあつて小乘では自分さへ悟ればそれでよいとして居るが、

小乘と大乘

大乘の方では自分が悟るばかりでなく他人をも悟らせねばならぬ、否なよし自分は悟らずとも他を悟らさねばならぬといふので自未得度先度他とて自分は渡らずとも他を渡らすといふのが主眼で菩薩といふものゝ行ひは此利他主義でなければならぬ、(菩薩のことは後にいふ)さて此自ら渡り他をも渡らすといふ到彼岸に六つの方法がある、これを六波羅密又六度といふて佛敎道德の大本となつて居る。それは

六波羅蜜

一　布施　これは梵語で檀那といふて施し合ひ惠み合ふことだ今日の語でいへば博愛慈善のことである、

二　持戒　梵語尸羅防非止惡の義で佛の戒めを守りて非を防ぎ惡を止め其操行を正しくして行くことである、

三　忍辱　梵語羼提といふて辱を忍ぶ、卽ち如何なる困難にも耐え忍ぶことで克己といひ忍耐といふのがこれである、

四　精進　精はクワシク、進はスヽムで一生懸命に勉勵努力することで梵語これを毘梨耶といふ、

五　禪定　梵語禪那譯して靜慮といふ心を靜かにして散亂せしめぬこと卽ち靜坐瞑想の義です、

六　智慧　これが卽ち今いふ所の般若波羅蜜である。

般若は目なり

の六つであるが、此六つの眼目となるべきものは第六の般若波羅蜜である、大智度論にも「五波羅蜜は盲の如く、般若波羅密は目あるが如し」とあつて先きの五つも第六の般若波羅蜜があつて初めて用を爲すので、此智

を缺きては如何に慈善を爲すとも、非を防ぎたりとするとも、忍耐したりとも、勉勵したりとも、靜慮したりとも盲者の河渡りで危險なことは此上もない行の足は知の目あつて初めて用を爲すのであるから般若波羅蜜は佛敎中最も肝要なものであります、

他力淨土と般若

既に智慧といふからは自力修行の上に於て般若の肝要なことは成る程左樣であらうが、他力淨土の宗門に於ては左程肝要でもなからうといふ人があらうが、それは以ての外の思ひ違ひで、其事は支門和尙の「講錄」に左の如く道破せられてある。（勿論淨土眞宗では此議論は立たぬが）

サテ又大論に般舟を父とし般若を母とすとあり、大品には菩薩、佛を見んと欲せば般若を行ぜよとあり、般舟三昧は（止觀常行三昧明之、）此三昧成ることは十方の佛現るゝこと淸夜の星の如しといへり、是れ卽ち般舟三昧成ることは般若に依るが故に父母と爲す、又大品に佛を見んと欲せば般若を行ぜよといふに當れり、若し般舟を行ずる者、般若に依らざれば父のみにして母なきが如くなれば三昧成らず、此般舟は步々聲々念々唯在阿彌陀と云ふて全く往生淨土の行なり、然らば淨土の行も般若によるべきなり、又今家には觀經の疏に心觀爲宗と云て淨土の行も心觀を以て宗とすれば、其心觀は卽ち一心三觀、其一心三觀は今の心經に全くのべたり、是れ亦た般若に依て淨土の行を爲すの

義なり、又此經の初めに觀世音を出して般若を行ずる準則としたまへり、觀世音は西方補處の大士にして觀音の如く、皆な人、深般若を行ぜば觀音に異らず、行相稱ふときんば別して往生も成り易き筈なり、此くの如く淨土も般若に依らずては叶はぬなれば念佛往生の人の爲めにも此經を講ず云々

心の字

とある、

經とは何ぞ

終りの心經の二字は漢語で、此心の字に就てもいろ〳〵の註を施した人もあるが、こゝにはさう深く見るに及ばぬ、羅什の譯には此心の字を除て般若波羅蜜大明咒經といひ、施護の譯にも佛說聖母般若波羅蜜多經とあつて此心の字を缺いて居る畢竟は般若波羅蜜多心の經と見てよいので、（法月の譯には善男子、菩薩有般若波羅蜜多心名曰普遍智藏とある）卽ち心といふのは人の身に心臟の最も大切なやうに般若波羅蜜は敎への中で最も肝要なものであるから心の字をかへたのであると見ても、大般若六百卷の精要を示したものであるから心といふのであると見ても差支はない、經といふのは梵語修多羅、貫線の義で、糸に花を貫いたやうに言語文字の上に多くの道理を貫き留めたので之れを義譯して經といふたので明の

永覺禪師は此經の意味を

此法は聖凡同稟の正軌、今古不易の常道、亦これ凡を出でゝ聖に入るの要徑なり

と云はれて經といふ字には正と常と徑との三義あるといはれて居るので無限の時間無限の空間に亙りて變易なき宇宙の大道で、聖に入るの捷徑といふのでつまり聖人の敎を指して經といふと見て居れば妨げはない。

以上でザット摩訶般若波羅蜜多心經といふ標題の略解をしたので大層むつかしくなつたが要するに人々個々分上ゆたかに具へたる大智慧光明を磨き出して自由自在に應用してゆくべき道を示された御經で、其道理は決して外に求むべきものではなく、人々自ら自分の心に考へ合せて見るがよい、正眼國師の「心經抄」に、

自己の心

此經は何を說かれたといふに般若の道理を說かれたものぞと覺ゆれば、いつのまにやら般若といふ言にそらされて、餘所のことのやうに覺ゆるぞ、只心經ぢやといふからは只自らの心を鏡に顯はしたと見るべし、此經ばかりでなく、一切の經論皆な其通りなり。

と云はれてある、どうか其考で見て下さい、

三　綱　要

これからがいよ〳〵本文

觀自在菩薩

觀自在菩薩

これは此經を示された御方で、普通に觀世音菩薩といふのと同じことで原名をアバローキーテースヴァラ (Avalôkitês'vara) といふて佛の化導を補佐したまふ補處の菩薩と崇め奉る御方で此世の人ではなく極樂世界の敎主阿彌陀如來の御弟子ではあるが、大慈悲心を以て一切衆生を濟度せんが爲めに諸種に姿を現じて御身を以て得度すべきものには佛身を現じて說法し長者の身を以て得度すべきものには長者の身を現じて說法し、居士の身を以て得度すべきものには居士の身を現じて說法し、童男童女の身を

觀世音

以て得度すべきものには童男童女の身を現じ、其他機に應じて三十三身にさま〳〵の姿を現じて濟度したまふ大慈大悲の菩薩である、此心經は實に此菩薩の示された經文であるといふのは事の上からいふ一應の説明で、理の上から研考すると、觀自在といふのは觀察を自由自在にするといふことで、賢首大師の略疏には

觀自在の義

理事無礙の境に於て觀達自在なり、故に此名を立つ、又機を觀て往て救ふ自在無閡なり、故に以て名を爲す、

とある、卽ち實相般若を觀じて自利を得、觀照般若を觀じて利他を行ずるので、自在といふのは慈恩大師の「幽贊」に十種の自在を擧げて、

一壽自在　二心自在　三財自在
四業自在　五生自在　六勝解自在
七願自在　八補力自在　九智自在
十法自在

とあるが要するに一切の境界に通達して自由自在なるをいふたので一行

觀自在と吾人

禪師の「大日經義釋」には「自在は富貴の義、富貴なれば人に物を施すこと自在なり、其の如く菩薩如幻三昧に住して願に應じて一切を度すること自在にして富人の如し」と云はれてある、兎に角智慧も自由なれば應用も自在なる境涯をいふたので、實はわれ〳〵相互の心の德性に名けたのに外ならぬので、天桂禪師の「止啼錢」に

觀自在とは異人にあらず、汝、諸人是れなり、何をか觀自在といふ、眼を開けば森羅萬象あり〳〵と現はれ、耳に通ずることは無量の音聲間斷なし、六根皆な是の如く十萬無量の事、一事に對すれども一として見ぬこともなく、聞ぬこともなし、この心の自在なること言語の及ぶべきなし、さるによりて華嚴經の中に十鏡の喩を以て説てある、其喩は十方に懸くるときに、九つの鏡が一つの鏡にうつる、其鏡の內を見れば百千の鏡が見ゆる、しかれども少しも鏡の鏡を礙ることなく、廣くもならず狹くもならぬ、その如く人の心に日用百千萬の事が移り來れども心に事多しと思ふこともなく、目に見る中に聲を聞き、舌に

味ひ身に寒暖一度に來れども目の見し止むを待て耳に入る聲の通ずるといふこともなく六根共に互に融通して礙ることなし、如是に觀ずることの自在なる故に各人の自己を指して觀自在菩薩といふなり

とあり、司空山の本淨禪師は

若し處に應じて本無心なりと會せば、始て名て觀自在に爲すことを得たり

と云はれて居る、われ〳〵お互、眼を開けば森羅萬象歴々分明、見得て妨げず、耳を聳れば鶯鳴鵲噪聽き得て妨げず、何者か以て吾人の自由自在を妨ぐべき、眞にこれ自由自在なるが我等の心であるに自ら縛して此自由を失ひ、我執に着して自在を忘れ、花の開落に喜憂し、月の盈虧に心を勞し此自由自在の境を吾から縛して苦み苦んで居るのである、若し夫れ我が心を空うしてこの宇宙を大觀せんか、宇宙の眞理はいつも吾等の前に現はれて居るのである、柳は染む觀音微妙の色、松は吹く說法度生の聲で宇宙の靈體と吾とは二にして一なり、應用無礙なる觀自在菩薩となることが出來るのである、十方の國土刹として身を現じたまはざるなき觀自在菩薩はまことにこれ宇宙の靈體で、此靈光は吾等の心の奥にも具はつて居るのであるが、今は全く秘佛となつて現れないのであるから一度我執の戸帳を開いて見れば、そこには觀自在の德性がある、之れを認めるのを靈覺といひ靈光輝き渡りて吾も亦觀自在菩薩と何の異るなきに至るのである。

宇宙の靈體

此觀自在菩薩のことを觀世音といふのは羅什の譯によるので、古くから一般にこれが行はれて居つたから後に玄奘が觀自在と譯したが、矢張古くからのいひ慣はしで觀世音といふて居るで、(天朝時代には光世音又は世自在と譯したこともあるが)原語の意味からいふと觀自在が正しいといふことである。

以上で觀自在といふ義は略ぼ說きましたが、未だ菩薩といふ語が遺つて居る、菩薩、詳くは菩提薩埵といふので菩提は覺卽ちサトリといふことで迷ひの夢の覺めたといふ覺、薩埵は有情とか衆生とか譯しますので、

菩薩とは何ぞ

これを覺有情と直譯し又は意譯して大士ともいひますつまり覺つた人といふので、これが自分ばかりが覺るのではない、一切衆生を覺らさうと心掛けて居るのであるから、菩薩には上菩提を求め、下衆生を化度するといふ二つの役があつて自利と利他と圓滿になつて行くので、別しては前にもいふた通り利他を先とするのである。或人の歌に

いつまでも浮世の人の渡守
有爲の波路のあらむかぎりは

とあるのは能く菩薩の心掛を示したものである。今觀自在菩薩に此大悲を以て一切衆生を救ひ其苦を拔き樂を與へやうとせらるゝのでこの次ぎの文句が衆生の苦を度せんとしたまふ時を示したので。

行深般若波羅蜜多時

さて此觀自在菩薩は如何なる行を以て一切衆生を救ひたまふかといふに、そは深般若波羅蜜多である、抑も般若の妙行には人空般若、法空般若の

二があつて人空を目して淺とし法空を以て深とするので今觀自在菩薩の行じ給ふは人空の淺でなく法空の深般若である。何をか人空般若といふかといふに人空といふは又我空ともいひ、我が此身は色、受、想、行、識の五蘊が假りに集つて成て居るので、五蘊を離れて別に我といふものがあるのではないと示す小乘教の說き方である、五蘊の蘊の字は積集の義で、われ〳〵が認めて我として居るものは、第一に色蘊といふてわれ〳〵の肉體、これに地大水大火大風大の四つよりて成り立つて居るので地大といふのは骨や肉のやうに堅固なものを總稱し、水大といふは血や唾液のやうに濕ひのあるもの、火大といふのは熱あたゝまり、風大といふのは動く性のあることをいふたので之れを又堅濕暖動の四大ともいひます、これは印度古來の說で物體は悉く此四つから成り立つて居るといふたので、(丁度希臘の哲學者エムペドクレースも亦これと同じく地水火風の四大を以て物質の元素として居る)我が身體も此四大の假和合に過ぎない、古歌に

よしもなく地水火風をかりあつめ
　我と思ふぞ愚かなりける

とあるのは此事をいふたのである、第二は受蘊で、受は領納の義で、眼に色を見、耳に聲を聽き、鼻で香を嗅ぎ、舌で味ひ、身で觸れて之れを心に受け込むので、第三は想蘊、想は思想の義でオモフといふ意味、卽ち受けたることを思ひはかる事、第四は行蘊、行は遷流造作の義で、思つた事に就て身を動かし口を動かし意を動して行く作用、第五は識蘊で、識は了別の義、眼に見、耳に聞いたることを一々分別して行く作用であります、これらの五つのもの(初めの一つは肉體、後の四つは精神)が集つて我といふものが出來るので圖に示せば左の如くなります、(尙ほ此事に就ては無受想行識といふ所で詳しく說きます)

この五蘊を離れて別に我あるにあらずといふて諸法無我の空理を觀じて空寂涅槃に入るのが人空般若であるが、法空般若に於ては啻に五蘊の假和合によりて成れる人身の實有にあらざるのみならず、其五蘊の法體も亦これ因緣によりて出來たもので自性あるのではなく、諸法本來そのまゝに空なりと觀じてゆくので人空といふただけでは人我を組織する五蘊はあるといふことになるが、今は其五蘊もないといふのが法空で今觀自在菩薩の觀じたまふは此法空の空なりといふ相對差別の考へをも棄て更らに進んで非有非空亦有亦空の理を觀照する所の深般若であるが、こゝには先づ法空を以て人空を破つたので昔、東坡居士がズカ〳〵と拂印和尙の室に入らうとせられた時に、佛印は此室には居士の坐席がないと云

はれた、スルト東坡は直に暫く和尚の四大を借りて坐となさんとやつた、和尚は喝して四大本と空、五蘊も亦有ることなし居士何を以て坐となさんとすると云はれたので、さすがの東坡も閉口したといふ話がある、今法空般若の理を究めては四大も五蘊も亦これ空である、ソコデ次ぎの文句に

照見五蘊皆空

とある、卽ち觀自在菩薩が離念の明智徹法の慧眼を以て五蘊を皆空と照見せられたので照はテラス見はミル、これ全く觀照般若の德で人も空なり法も空なり、一切萬法悉くこれ空ならざるはなしと認められたので斯く觀じ來たれば心地快濶何の苦惱のあるべきでないが、われ〳〵お互は此色身を眞にあるものと思ひて生を悅び死を悲み、一切の事に苦惱を生ずるので、よく〳〵此身を究むれば父母の因緣より起つたもので別に自性あるべきではない、此事を止啼錢には「例へば燈火の如き燈心と油と盞

との緣で、あり〳〵と燃ゆれども、其火性を求るに竟に得べきなし、色身もその如く地水火風を一々に返して畢て後に空といふは、暫く有相の目に掛る人の爲にいひたることとなり、四大を本へ返すに及ばず、そのまま皆空にして返すべきものもなし、愛想行識共に緣起にして實なきものと知らぬ一念より色が眼に映じ聲が耳に入つたと思ひ、六根共にその如くに想ふ、その思想共に想緣起の影なる事を知らず、實に緣に移り、少より老に至ると想ふ、皆なこれ汝が分別なり、分別なきに色身の方より老なり少なりとは云はぬなり、識といふもたゞ緣に對する時は了別して知るに似たれども影の如く響の如くにして思想より外、微塵ばかりも物なきを實にあるものと思ふ故に其思想が一物となるなり、又此了別するものを本心なりと執着する人多し、是を佛も賊を認めて子と爲すと呵責し、古德も

無量劫來生死本、痴人喚ア爲本來人ー

といへり、實有の思想より、人となり天となり十界種々の境界に渡て車

の廻るが如く生を引き形段を取て輪廻止むことなし、諸佛諸祖共に之を憐みて自心本來清淨圓明にして生死あることなく、五蘊皆空なりと示したまふも、汝が輪廻の妄分別を止んが爲めなり、上の如く自心一物なきことを證するときは五蘊空なりと會するのみではなく、其空なりと解する分別もなき時を、強て名けて眞空を得れりといふなり」と說いてある、人も空、法も空、生死岸頭何の苦惱がある、每度申すのであるが昔は僧肇法師が首を斬らるゝ時に「四大元無主、五陰本來空、將頭臨白刃、猶似斬春風」といひ、圓覺寺の祖無學祖元禪師が未だ支那に居られた時、元兵の爲めに將に斬られんとして白刃の下、「乾坤無地卓孤節、喜得人空法又空、珍重大元三尺劍、電光形裏斬春風」と云はれたので、さすがに亂暴な元兵も害を加へなかつたといふのは有名な話で、我が國にもこれと同じやうな例は澤山ある彼の北條氏討滅を企てた日野資朝の佐渡に斬らるゝ時

五蘊假成形、四大今歸空　將首當白刃　截斷一陣風

といふて自若として逝きしも右少辨俊基の辭世に

古來一句、無生無死　萬里雲盡　長江水清

とあつて天空海濶の空を示して居るのも皆なこの理を觀じ得たからである、照見五蘊皆空は行深般若の方法、其目的はといへば

度一切苦厄

四苦八苦

にある、度は濟度のことで前にいふた波羅蜜卽ち到彼岸のことだ、卽ち內は自らの苦を濟度し外は一切衆生の苦を救ふのが行深般若の目的で大慈大悲の觀自在菩薩は此目的を達せんが爲め深般若波羅蜜を行せらるゝのである、苦は苦腦、厄は厄難と續いて吾々一切衆生の苦みのことだ、此世の苦み數限りなくあるが佛敎では之れを四苦八苦に纏める、四苦といふのは生、老、病、死で悉くこれ苦の集團で實際生活の上に於ては愛別離苦として天にあつては比翼の鳥、地にあつては連理の枝といふた夫婦の間も、可愛いと思ふ親子の間も、生別あり死別あつて別れねばならぬといふ苦は免れないで又これと反對に憎いと思ふ人にも會はねばならぬ

苦がある、これを怨憎會苦といふ、そればかりではなく、求めても會られざる求不得苦といふのがある、「物事の一つ叶へば又二つ三つ四つ五つ六つかしの世や」で、あゝ爲たいかう爲たいと思ふても其通りにならぬが浮世の慣ひ、此外に五陰盛苦といふのがある、五陰といふのは五蘊のことで色、受、想、行、識の五が其性を蓋覆して衆苦集り來るを免れない、先きの四苦に此四つを加へて八苦といふのであるが、皆なこれ生より始り死に終るまでのことであるで約めて見れば一切苦厄の源は生と死との二に歸する、されば此生死を離るゝは佛敎の根本義である、道元彈師が「生を明め死を明むるは佛家一大事の因緣なり」と云はれた如く生死の問題は佛敎の中堅となつて居る、此生死に別段の生死と變易の生死との二がある、分段といふのは身に分限あり體に形段ありといふて馬には馬の分限形段、牛には牛の分限形段、われ〳〵人間で申しても八兵衞には八兵衞の分限形段、太郎作には太郎作の分限形段があるが、それが又此の世で作つた業力(業力のことは後に話す)によつて或は地獄、或は餓鬼、或は

分段生死

畜生、或は修羅、或は人間、或は天上と生れ代り死に代り生々世々六道に輪廻してさま〴〵の分段の身を受けて盡ることなく、其形に從て種々の苦を受けるので、飜譯名義集に

分は卽ち分限、段は卽ち形段、謂く六道の衆生、其業力に隨て感ずる所の果報、身には長あり短あり、命には卽ち壽あり夭あり而して皆な生死に流轉す、故に分段生死と名く

とあるので、ツマリ肉體の生死を指したのであるが、既に人空般若によつて我といふものゝあるべきでないといふことが解れば煩惱障を斷つて此分段生死の苦を受くることはないが、未だ精神上の生死が遺つて居る、これを變易生死といふ、同じく飜譯名義集に

變易生死

因移り果易るを名けて變易と爲す、謂く阿羅漢辟支佛菩薩既に三界の生死を離れ方便等の土に出生し、因移り果易るを論じて生死と爲し、之れを變易生死と名く

とあるので、之れを詳しく講述すればいろ〳〵むづかしいことになるが、

阿羅漢や辟支佛などといふのは小乘教の悟を開いた方で、人空の理を會得して煩惱の障がないから肉身の生死を受くべき業因は盡きたが、まだ法空般若の深きに入らず、心に諸法ありと思ふ所知の障といふものがある、これあるが爲めに精神上の因移り果易ることを斷つことが出來ぬ、これを變易生死といふたので未だ少し迷ひが遺つて居る、或る人の歌に

雨あられ雪や氷とへだつれど
　とくればおなじ谷川の水

といふのがある、これは人空の理を悟つたのと同じく、雨の霰の雪の氷のといふ分段のものがあるのではない、溶けてしまへば同じ水だといふのだが、此溶けてしまへばといふことが遺つて居つては法空とは行かぬ、見來れば宇宙法界そのまゝに實相般若の空德が現れて居るので

如何なれば雪や氷とへだつらん
　とけぬもおなじ谷川の水

だ、空といふたからとて何もないと思ふと大きな間違ひ、この事は後に

話すが今謂ふ所の般若の空は何にもないといふのではない、眞空にして妙有の境に入らねばならぬのであるから生だの死だのに心を勞して居るのが間違であるは勿論、生死を斷離したと思ふ心のあるのも間違である、神子上典膳が伊藤一刀齋に劍道を習ふた時に、一刀齋がいふには武術は何時如何なる時に敵に遇ふやも計られぬで平生の用心肝要なりとて、神子上典膳が飯を食ふて居るとビシャリと打つて、どうだそんな無用心なことで武術修業がなるかと叱りつける、朝、庭の掃除をして居ると後から來てビシャリ、そんなことで武術修業がなるか、書物を讀んで居るとビシャリ、そんなことでよいか、厠に行かうとするとビシャリ、そんな無用心で何になると、行住坐臥、いつとなくビシャリ〳〵とやられるものであるから典膳は常に油斷のないように心掛けて充分に工夫をしたから釜の下を焚きつけて居るのを一刀齋が例の如くビシャリとやつたのを今度はヒョイと外して先生如何でござるといふと、そこを一刀齋がビシャリ、それではゆかぬといふたといふ話がある、ヒョイと外した所はよ

いが、先生如何でござるといふたときに早や油斷があつたのだ、分段生死は離れたと思ふとまだ變易の生死が遺つて居つては何にもならぬ、今は觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行じたまふと五蘊皆空と照見し人法二空を達觀したまふたのであるから二種の生死の苦は悉く度し盡くして餘蘊がない、已に生死の苦を度す、一切の苦厄あるべきではない、これを度一切苦厄といふ、

煩惱障所知障

こゝに一寸說て置かればならぬことは煩惱障、所知障のことです、煩惱障といふのは昏煩の法、心神を惱亂するので人我の見を本として貪欲瞋恚愚痴等の心を起して正道を障へるので、これあるが爲めに分段生死の苦を受けるが、所知障といふのは所證の法を執して智慧の性を障へるので其爲めに變易生死の苦を免るゝことが出來ないのである、此事は詳しく說けば餘程むづかしいことになりますが、今は略して置きます、

以上で弘法大師の人法總通分とせられた此經の綱要は終つたので、これから下は佛敎各宗の所說を一々に示されたのであるとも見ることの出來る分別諸乘分です。

對告衆

四　實義上

ソコデ觀自在菩薩は

舍利子

と呼びかけられて說法を初められた。何時でも佛が說法をせられる時には其中の一人を擇びて之れに話しかけられる例となつて居る。これを對告衆といふので、此時座に列なつて居つた比丘百千人菩薩七萬七千人(法月の譯による)もあるが今は般若の話であるから佛の十大弟子の中で智慧第一と云はれた舍利子を對告の人とせられたのであります、智慧第一とは云はれたが、此時はまだ人空のみを悟つて法空の道理を知らない小乘の人たること免れなかつたから、こゝに一切皆空般若の妙理を說き示されたのであります、今觀自在菩薩が舍利子と呼びかけられたからとて舍子一人にのみ告げたまふのではない、列坐の大衆悉くに告げらるゝのだ、

舍利子の事

否、列坐の大衆のみではない一切衆生に告げらるゝのだ、われ〳〵お互此經を讀むものも今親しく觀世音菩薩がわれ〳〵に告げさせられるのだと心得て諦聽せねばならぬ。

此舍利子といふのは阿彌陀經などで舍利弗と書いてあると同じお方で、舍利子といふたのは梵漢兼擧で、舍利は梵語、鷲鷺と譯し、梵語の弗多羅を子と譯するので、之は舍利弗の母親が聰明にして辯才滯りなき事鷲鷺の眼の動轉分明なるに似たるを以て鳥に因て舍利といふた其人の子なるが故に舍利子といふたのだ、何にも舍利子だけに云はるゝのではない唐の善導大師は「佛、舍利弗に告るは一切衆生に告るなり」と云はれたのは茲にも應用せらるゝことである、さて舍利子を呼びかけて何をか說かる。

色不異空、空不異色、色卽是空、空卽是色

これからがいよ〳〵深般若の空を說かれるので、この空といふのは虛無空寂といふやうな何にもないといふのではない、森羅萬象歷々としてそのまゝに空なりといふ佛敎の意義を示すので、之れをいふには先づ眞空妙有といふことを話さなければならぬ。宇宙の現象は、千差萬別でさまざまであるが其本體は平等一如で差別のあるべきものではない、何故に平等一如の本體から萬象の差別を生ずるのであるかといふに、これは因と緣とによるので、因といふたのは原因、緣といふのは此原因を助くる所の事情で、一切諸法は悉く此因と緣との掛け合せて出來て居る假りの相で、因緣を離れて何にもあるべきではない、試に一本の扇子を取りて見よ、これは糊と紙と竹とによりて出來て居つて糊と紙と竹とを離れて別に扇子といふものがあるのではない、糊と紙と竹とが假りに和合して扇子といふ相を現はして居るに過ぎない、然らば糊と紙と竹とさへあれば何時でも扇子になるかといふに、さうはいかぬ、糊と紙と竹とは因で之れを扇子に造るといふ緣が加はらねば同じ糊と紙と竹とでも造る緣が異れば提灯ともなり團扇となる、同じ桐の木でも机となるものもあれば下駄となるものもあり、又佛像となるのもある皆なこれ因緣和合の上に

因緣生

般若の偈

出來る假りの相で、机なら机、下駄なら下駄、扇子なら扇子、提燈なら提燈の自性があるのではない、本體皆空の上に暫く因緣和合の相を現はして居るのである、されば中觀論には

因緣所生の法、我れ卽ちこれ空と說く

とあり、大般若經の偈文には

諸法皆是因緣生、因緣生故無自性、無自性故無去來、無去來故無所得、無所得故畢竟空、畢竟空故是名般若波羅蜜

とあつて一切諸法は悉く因緣の假和合で自性といふ者があるのではない、畢竟は大海の上に因緣の風によつて起つた波ぢや、此風を離れて波といふものゝ自性があるのではない、既に自性がないのであるから去來もなく所得もなく畢竟空だ、畢竟空だといふても何にもないのではない、一味平等の大海の水は不生不滅にいつでもある、此一味平等の上にいろいろの波を立てゝ居るのが宇宙の現象ぢや、水を離れて波はない、波といふは本體空の上の假相ぢや、しかし波を離れて水のあるのでもない、水と波とは二にして二にあらずで、眞空の中に妙有存す、無一物處無盡藏、花あり月あり樓臺ありぢや、爛漫たる花も、もとより花の自性のあるのではない、

天台の三諦

年毎に咲くや吉野の櫻花
木を割りて見よ花のありかを

だ、三冬風寒きの時如何に木を割つたからとて花のあるべきではないが、春風駘蕩の緣が加はつてこゝに爛漫の美を呈するので之も亦因緣生、彼の金殿玉樓も木や金や石の因緣和合によつて出來て居るので木や石や金の因緣を離れて金殿玉樓の自性といふものがあるべきではない、これを天台宗では假諦といふ、假諦といふのは因緣假和合の上に出來た假りの相で、其本體はといへば一味平等の空諦ぢや、しかも空にして假、假にして空なるが宇宙の實相であるから之れを非有非空亦有亦空の中道といひ、これを中諦と呼ぶ、蓋し此三は宇宙眞理の三方面で、三にして一、一にして三なるものだ、「摩訶止觀」に

眞空妙有

一切法卽空卽假卽中、一二三なくして一二三、一二三なき是れ一二三を遮して而して一二三、是れ一二三を照すなり

とあつて渾然圓融して居る、それを假諦の有に迷ふて宇宙萬象は個々差別のものであると執じて居るのは人空の道理をも心得ぬ妄見であるが、さればとて空諦のみに執じて宇宙萬象は平等一味であるとのみ思ふて居るのも迷ひたるを免れぬ、石頭大師の參同契に

執事元是迷、契理亦非悟

と喝破せられたるもこゝの道理で、事といふは萬象差別の相をいふたので此の假相に執着するの迷ひであるはいふまでもなく、理といふて平等一如の理體のみを悟つて平等卽差別、差別卽平等の妙理を認め、眞空の上に妙有ありといふことを知らぬのは未だ眞の悟とはいへぬ、無住法師の砂石集に昔、伊豆山に學匠があつて弟子や下人の居らない時に鹽賣を呼んで鹽を買はうとして一俵の代に上品の絹を一匹やつた、弟子達が歸つて來てそれは大變な損をなさつた上品の絹一匹あれば鹽は十俵も得られるといふと、其學匠は明くる日來た樽賣を呼びとめて其樽を無代で置て行け、昨日鹽の代りに絹をやつて多くの利分を與へてあるからと云はれると、弟子達が笑つて昨日のは鹽賣、今日のは樽賣でござるといふと、學匠すまして鹽賣は鹽賣、樽賣は樽賣と差別をするのは別教の見地で、我が大乘圓教の極意からいへば鹽賣卽樽賣、樽賣卽鹽賣ぢやと云はれたといふ話がある、これは平等を知つて差別を知らない妄見である、これは事を執するの迷なるを知て未だ理に契ふも悟にあらざるを知らぬので宇宙の眞相は事理の二つ圓融無礙平等卽差別、差別卽平等で哲學的の語でいへば現象は卽實在で、實在は卽現象だ、宇宙の本體空の上に萬象差別の假相あり、此假相を外にして宇宙の本體を求むることは出來ない、曾て此事を說て

平等卽差別

宇宙觀の大要

されば此宇宙と吾等とは全く關係のない者ではなくて微小なりといへども、吾等は宇宙の一部分である、一部分を缺けば宇宙を以て完全なるものといふことは出來ない、吾等の存否は直に宇宙の完不完に影響

するのである、吾等と宇宙との關係は水と波との如きものである、波には生滅の相あれども其本體たる水は不生不滅である、しかも此水を離れて波なく、此波を離れて水なし、波たる現象は卽水たる實在である、此波には怒濤あり驚瀾あり細漣あり小波あり或るものは山の如くに動き、或るものは水沫の泡と消え、千狀萬態異種多樣であるが、其水たる土より見れば悉くこれ平等一如、別に異りはないのである。宇宙の現象も又亦此の如く、千狀萬態異種多樣一として同じきものはないが、其本體よりいへば一として異るものはない、我といへば乾坤只一人で、外に同じものは一つもないが、人といへば地球上十五億萬皆なこれ同一である、同一の人にして別個の我、別個の我にして同一の人である。我であるから人でないことはなく、人であるから我でないといふことはない。これ唯だ人の上に就ていふのみではない、更に此考察を廣めて動物といひ生物といひ物といふに至ては天地同根宇宙一體、我と物と何の異る所はない。試に眼前の茶碗を見よ、茶碗と我とは何の似る所もないやうであるが、此の茶碗の體はこれ土、我れは土に養はれたる米を食ひて生存す、されば米は我が母にして土は米の母たり、これこの茶碗我が祖母たる土によつて作らる、然らばこれ我れの最も近き親戚の關係を有するのではあるまいか。哲學者は之れを名けて萬物一體の理といふ。萬物は啻に其體に於て同一なるのみならず、其用に於て相互に密接不離の關係を持つて居るのである。我が此の書を稿するの筆は此の書とは密接の關係あることはいふまでもない、既に此書と密接の關係あれば此書の讀者とは亦不離の關係があるのである。假りに此筆を以て兎毛に成れりとせよ。然らば野山に遊ぶ兎と此書の讀者とは亦不離の關係があるのではないか、此兎は草を餌とす、此草は太陽の光と地の土とによつて養はれ、其太陽の光と其地の土とはと次ぎから次ぎへ考察してゆけば宇宙萬物が互に密接不離の關係を有するを會得することが出來る。更らに我が身に直接なるものに就て考へよ、衣も食も住も他人の力に由り、自然の助けを受く、我を主と

していへば、萬象は悉く我に向つて働く如くに感ずることが出來る、これを萬象相關の理といふ。萬物互に密接不離の關係あり、されば我が一擧一動は直に宇宙全體に影響する大事業ではないか。能く此理を了解する時は我が身の微小なるを慨くの要はないのである、微小なりといへども、我は天地の一員にして宇宙の一部たり。しかも其一擧一動は直に全宇宙に影響し、其存否は直に宇宙の完不完に關するのである、曾ては我が身の微小なるを嘆じたる吾等も學理の此說明によつて此身の偉大なるを感ずるのである。(修道講話)

といふたことがある。今此心經の文句は直に此原理を說き示されたもので、現象の色は本體の空に異ならず、本體の空は又現象の色に異ならずで、色の外に空なく、空の外に色はない、差別そのまゝに平等、平等そのまゝに差別、異別の中に同一あり、同一の中に異別がある、卽ち眞空妙有だ、しかも異らずといふたのでは色と空とが同じものといふたのかといふ誤解がないではないで、更に卽の字を入れて色卽是空、空卽是色といふた卽は離にして不離の義で色は色のまゝに空、空は空のまゝに色で、先きに云ふた「とけぬも同じ谷川の水」だ、蜷川新左衞門が一休和尙の所を訪ねた時に、一休が

何物かさし上げたくは思へども
達磨宗にて一物もなし

と云つて本來空を示した、スルト蜷川新左衞門は

何物も無きを賜る心こそ
本來空の妙味なりけり

とやつたといふことで、色卽是空、空卽是色だ、一休禪師が空卽是色を咏んだ歌に

花を見よ色香も共に散りはてゝ
心なくても春は來にけり

といふのがある、因緣によつて花は開き、因緣を離れて花はない、蘭溪禪師いふ、

禪家の解釋

空は色に依て現ず、色は卽ち空に歸す、心起るが故に色なり、心に所依なきが故に空なり、心空を了悟すれば諸法自ら空なり、眞空端的作麼生が道ん、山上の鯉魚、水底の蓬塵

と、こはこれ禪家一流の着語、參究し見よ、盤珪禪師は婆說して、

一切諸法あらゆる色相の上へ當體色相を見ず、ありながら空なるものなり、故に色にあらず空なりといふべきを異らずとは宣ふなり、又これに取り着きて萬般の事を空なるものと思ひ、後には人の常道を失ひ、父母も空なり、兄弟も空なり、上人下人みな空なりと云つて敬ひもなく憐もなきやうになる、これは得手勝手の空なり、故に再び空不異色と宣ふ、一切空なる故に又一微塵として礙へることなく、空として色にあらざるはなし、天は天なり、地は地なり、僧は僧、俗は俗、父母兄弟一切諸法たゞありのまゝにしてさわりなきなり、これを詳かに知らせん爲め色卽是空空卽是色としめしたまへるなり

と。此一句は心理の中心ともなるべきことで佛敎の原理をいひあらはしたのでありますから、少し煩瑣に涉りましたが、いろ〳〵の方面から之れを說き示したので、一面は佛敎の宇宙觀を見、他面に於てはわれ〳〵修養の規箴とすることが出來るのです、尙ほ後の文句を參照して下さい。

受想行識亦復如是

先きには五蘊の中の色蘊だけに就ていふたが他の四蘊も矢張同じことで、詳しくいへば

「受は空に異らず、空は受に異らず、受卽是空、空卽是受、想は空に異らず、空は想に異らず、想卽是空、空卽是想、行は空に異らず、空は行に異らず、行卽是空、空卽是行、識は空に異らず、空は識に異らず、識卽是空、空卽是識

といふべきだが、今は略して亦た復た是の如くといふたので、五蘊の中の物質に屬する色ばかりが空ではなく、精神に屬する受想行識も亦空だといふので、廣く見れば色といふたのは客觀界、他の四蘊は皆な心に屬

主觀と客觀

するので主觀界だ卽ち主觀といひ客觀といふも共に本體空の上に因緣によつて現れたる影であるといふのが此句の意味だ、此天地間の萬象實にさま〴〵あるが之を二つに分ければ主觀と客觀との外はない、客觀と云ふのは心に映るの影美しいと見醜いと見るのも心からで心外無別法といふ語を誤解して心の外に物はないといふ純唯心純主觀の議論も立つのでは佛敎の中でも法相宗(唯識宗ともいふ)は此純唯心純主觀の上に立脚するのでわれ〳〵の心の主となるべきもの(これを心王といふ)を八に分ち、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識を以て前五識といふて眼には色、耳には聲、鼻には香、舌には味、身には觸の感覺作用を爲すので、之れを受けていろいろな想ひを起し分別をするのが意識で、受、想、行、識の四つは此意識の上の作用、之れを統一して我といふ考を起してゆくのが末那識、末那(Manas)は梵語で譯して我見識といふて居る、此識によつてはさま〴〵の心象を起すのであるが、其本となるべきものを阿賴耶識(Arya)といふので藏識又は種子識と譯する卽ち一切の種子を藏して居るのが此識で、

八識

心境俱忘

森羅萬象は悉く此識の上に現はれたる影に過きない、丁度夢を見て居つて其の夢中のものを眞に有りと思ふて居るやうなもので唯だこれ夢の所變これを外にして何にもあるべきでないといふのであるが、今眞空の理を會得して見れば此識といふものも亦因緣によつて生じたものでもともとあるべきものではない、夢を見て居る折に夢中のものを眞に有りと思ふのが迷ひであるは云ふまでもないが、其夢といふものも亦あるべきものではない、中觀論には

未だ一法として因緣より生ぜざるはなし

にあらざるはなし

とある通り、客觀の境が空であると共に主觀の識も亦空、心境共に空であるべきだ、しかし唯だ空といふたゞけでは一方に偏して決して中道實相の眞空妙有を得たものではない、古人もいふた通り「濕性不變の水なくんば何ぞ虛妄假相の波あらん、若し淨明不變の鏡なくんば何ぞ種々虛妄の影あらん」で、心境共に空のまゝに又心境歷然として其相をあらはして

四料簡

居るので主觀といひ客觀といひ心といひ境といふのは共に現象界のことで、此現象がそのまゝ本體の空で識卽是空空卽是識である、臨濟大師或る時は奪人不奪境と云はれたのは境卽ち客觀で、見來れば柳の綠なる花の紅なる萬境歷然だが、又奪境不奪人と見る時は識卽ち主觀のみで乾坤只一人、人の外に境はないが此人といひ境といふも共にこれ現象、人境俱奪となれば一切空で鏡の明かなるに似たりぢやが、其鏡の上には萬象の影歷々で、人境俱不奪の見地に入らねばならぬ。

佛敎の根本義

話がむづかしくなつたが要するに五蘊皆空と云ふたからとて空に執着してはならぬ、空卽五蘊だといふ眞空妙有の理を繰返し色空交徹、隱顯自在、存亡同時なる華嚴の妙理、三諦圓融、中道實相の天台の極意、禪眞言の玄義をも以上の中に含ませ佛敎の根本義たる現象卽實在の風光を示されたのである。

五　實義下

更らに下て此の空を說き、

相對と絕對

舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減

再び舍利子と喚び掛けて是の諸法の空相を說明して不生不滅不垢不淨不增不減なりと仰せられた、諸法は因緣に依て生じた者であるから又因緣によつて滅することもある、因緣によつて垢とケガレルこともあり淨とキヨクなることもあり增すこともあり減ずることもあるが、之は波の上のことで其本體たる水には生滅もなく垢淨もなく增減もない樣に諸法の空相は、かゝる相對差別の姿はないぞとの意である、凡そ此世の中のものは皆な相對差別で長があれば短あり、表があれば裏があり、賢があれば愚があり美があれば醜がある、といふやうになつて居る、茲に於てわれ〳〵は何れを取るべきかといふて迷ふのであるが、今諸法の本體本性は平等一如無限絕對で相對差別の境を超絕して居るから迷はんとて迷はるべきではない、此迷はんとて迷はるべきでない諸法の空相を知らず因緣

八不中道

假和合の上に暫く差別相對の相を現はして居る姿に迷ふて美を好み醜を憎み、生を愛し死を厭ふて居るのである、試に宇宙の現象を見んか、先きにもいふた萬有異別で一つとして同じものはなく雜多で相對であるから不自由で不完全で且つ一として獨立して居るものはなく悉く依立の姿だが、其本體は絶對で純一で自由で完全で獨立である此本體の上に安立すれば迷ひはなく從て苦惱のあるべきでないに現象に迷ふて苦み惱んで居るのである、涅槃經に

衆生見を起すに凡そ二種あり、一には斷(空)二には常(有)是の如きの二見を中道と名けず、無常無斷(非有非空)を乃ち中道と名く

と、更に中觀論には八不の說を立てゝ此理が示されてある、文に

不生亦不滅、不斷亦不常、不一亦不異、不去亦不來、能く此因緣を說き、善く諸の戲論を滅す、我稽首して佛を禮するに諸說中の第一なればなり

とあつて一、異、斷、常、生、滅、去、來といふ如き差別に執する偏見を打して迷雲散じて眞理の明月現はるゝを八不中道といふて之れを主として立つて居る宗旨が三論宗である、されば弘法大師の秘鍵なぞによると心經中の此句を以て三論に當ると見ることが出來る

凡夫と菩薩と佛果

諸法の體性既に生滅なし、希ふべき生もなく厭ふべき死もない何の垢れあり何の淨あるべく何の增す所あり何の減ずる所かあらん、

賢首大師は生滅、垢淨、增減を凡夫と菩薩と佛果との三に約して凡夫は此に生じ此に死して長く流轉し色法は緣に隨つて生滅するが、眞空は絶對平等で生滅の相を離るゝが故に不生不滅といふ、菩薩は煩惱障を斷じて淨行を修して居るが未だ所知障を除かないから淨德圓かならず尙ほ垢淨の相を存するが今眞空は絶對平等で煩惱の垢や菩提の淨を絶して居るから不垢不淨といひ、佛果に至りて其德圓かなりとも眞空の上には增減はないから不增不減といふのだといひ、更らに三性に配してこれを說かれて居る、三性といふのは偏計所執、依地起性、圓成實性のことで偏計所執といふのはわれ〳〵お互の迷情によりて實に有

るべきものでないのをあると執して途に落ちたる繩を認めて蛇として驚いて居るやうに我法二空の道理を知らず實我實法ありと執するのであるが、今は此妄執を去つて無相の觀をなせば生滅の定相はない之れを不生不滅といふのだ、しかし蛇ではない繩だと知つて其繩をあるべきと思ふて居るのも矢張り迷ひで其繩は元來麻糸が組み合はされて出來たもの卽ち他の因緣によつて生起したものである之れを依他起性といふ今此道理を悟つて諸法は自性なきものと知れば垢だの淨だのといふ定相はない此無生の觀をなすを不垢不淨といふ、さて繩ではない其本體は麻であつたと知るのを圓成實性といふので蛇でなく繩でないといふても其本體たる麻には增もなく減もないと觀ずるのを不增不減といふといはれてある。

是故空中、無色、無受想行識

是の故にといふは上を承けて下を起すの語で、諸法の異相は不生不滅不垢不淨不增不減であるから此不生不滅不垢不淨不增不減なる空中には色もなく受想行識も無いといふのが此句の意だ、此無いといふことを單に色も受も想も行も識も無いのだと解しては大きな誤りでそれでも頑空として何にも無いものになつてしまう、こゝの意味は空を離れた色も受も想も行も識もないといふのでかく解して初めて眞空妙有の理を會得して行くことが出來るので此後の無明もないから智も無く得も無くといふまでゞ皆な此空中といふ二字が掛るのであるといふことを忘れてはならぬ。

さて色受想行識のことは前からしば〳〵出て來たが、此五蘊は啻に我といふものを造る要素であるのみならず宇宙萬象は此五の中に含まれるので先にもいふた通り一切客觀の境界、卽ち目に見、耳に聽き、鼻に嗅ぎ、舌に味ひ、身に觸れることの出來る外境は悉くこれ色の一字に收り。後の四つは內心卽ち主觀に屬するのであるが、其中でも主觀中の主觀といふべきは識の一つで此識と外境卽ち色との交涉によつて出來る心象が受想行の三つである、廣くいへば受想行識の四つ共に意識の作用だが、其

意識の解

根本となるべきものは識である。されば佛教では此意識を分ちて五俱の意識と獨頭の意識との二つにする、五俱の意識といふのは眼、耳、鼻、舌、身の五官によつて受納して起す心の作用で、五官を離れて意識のみ働くのを獨頭の意識といふて、これに三ある、

一　夢中意識　睡眠中に起る心の働きで此時には五官が働いて居るのではなく意識のみ獨り働くのである

二　獨散意識　これは記憶の再現とか想像とかいふやうな時の心の狀態で現に見聞して居るのではなく曾て見聞したことが意識の中に潛んで居つてそれが働いたり又は未だ見聞しないことをさま〴〵に想像してゆくなぞの心の働きである

三　定中意識　これは禪定の時卽ち靜坐瞑想の際に於ける心の狀態である

かくの如く意識の對境となるべきものは單に五官のみではなく其區域が頗る廣い、此意識の對境となるべきものを法境といふ、先きの五官に對する色、聲、香、味、觸に此法を合せて六境といふて皆な心の働きをする相手となるものだ、さて斯くの如くいふと此意識といふものゝみはあるものゝやうだが、これは皆な我といふ考の上に起つたので其本には我見識と名けられたる、末那識がある、此末那識といふものも其本は阿賴耶識の上に現はれたものに過ぎないといふのが前にもいふた唯識宗の議論であるが、それでは未だ眞空ではなく阿賴耶だけが遺る、實大乘の極意からいへば此阿賴耶識も亦眞如海上に起つた波に過ぎないといふので、湛然たる眞如の大海に無明の風が吹いて起つたのが此阿賴耶識で阿賴耶は眞如と無明、覺と不覺とに跨るものて矢張因緣所生のものたるに過ぎぬ。といふのであるから意識がないのみではなく、これを統一する末那識もなく其本となるべき阿賴耶識もない、皆なこれ眞如海上の波だ、主觀といひ客觀といひ、色といひ受想行識といふも眞如を離れて外にあるではない。此事を玆に色もなく受想行識もなしと說いたのである。

阿賴耶と眞如

心理學の分類

意識の作用を受、想、行、識の四に分類するのは佛敎通途の說である が、今日の心理學者の分類も略ぼ之れに似通ふて居る福來博士の「心理學講義」に意識を大別して五種とし左の如く云はれてある。

一　感覺　色彩、音響、香臭、味、觸、疼痛、疲勞等の意識を感覺といふ、

二　情念　悲哀、憤怒、同情、失望、趣味等の意識を情念といふ、

三　欲念　菓子を「食ひたし」茶を「飲みたし」花を「見たし」等の意識を欲念といふ、

四　觀念　嘗て經驗したる感覺、情念、欲念を唯單純に「思ひ出し」或は「思ひ浮べる」ことによりて生ずる意識を觀念といふ、

五　認識　與へられたる感覺によりて、外界事物に關して種々の觀念を浮べ以て該事物の何物たるやを認知することによりて生ずる意識を認識といふ、例へば白色雪の如きものを見て之れを味へば甘かるべしと觀念し、以て之れを砂糖なりと認知するが如し

と感覺は受、情念は想、欲念は行、觀念と認識とは識に當ると見ることが出來る、次ぎも矢張り眞空妙有を明すので

扶塵根

無眼、耳、鼻、舌、身、意、無色、聲、香、味、觸、法

これは空中には六根六境のないことを云はれたので、眼耳鼻舌身意の六つを六根といふので、根といふのは根莖又は根本といふやうな意味で六識の根本となるものであるから六根といふたので、之れに扶塵根と勝義根との二がある、扶塵根といふのは六塵を六根に受けるの扶けになるといふ意味で六塵といふのは卽ち色、聲、香、味、觸、法の六つで、われわれお互の天然淸淨なる心が此六の爲めに汚されるから之れを塵といふたので、眼に色を見耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味ひ、身に觸れ、意でさまざまなことを思ふて（これを法境といふことは前にいふた）美とか醜とか憎とか可愛いとか欲しいとか惜しいとか、さまざまの心を起す

勝義根

六根六境

のである、今扶塵根といふのは之れを心に引き入れる所の眼とか耳とか鼻とか舌とか身とか意とか(こゝに意といふのは無形の心でなく有形肉體的のもので腦髓の如きものを指すのである)を指すので、勝義根といふのは正しく六塵を受ける所のもの眼にあつては視神經、耳にあつては聽神經の如きもので、扶塵根たる眼や耳があつても視神經のないものは明盲で、聽神經のないものは聾のやうなものだ、盲や聾だからとて眼や耳がないには限らぬ、眼があつても見えず、耳があつても聽こえぬのは此勝義根がないからである、さて此六根が六境を受けてこゝに六識が生ずるのであるから之れを十二處といひます、處とは生長の義で此六根六境が能く六識を生長せしむるからかく名けたので又六根六境相渉入する所から十二入ともいひます、此十二處十二入とて別のものではない皆なこれ眞空の上に現れたる影で、眞空を離れて六根も六境もあるべきではない、次ぎの文句と共に更らに話いたします。

無眼界乃至無意識界

六根六境を名けて十二入といひましたが、之れに六識を加へて十八界といふ、今は此十八界の空を示したので、界は境界の義で此十八は互に聯續して一團卽ち一世界を成し其種類自性で界を爲して居る詳しくいへば眼界耳界鼻界舌界身界意界、(以上六根)色界聲界香界味界觸界法界(以上六境)眼識界、耳識界、鼻識界、舌識界、身識界、意識界(以上六識)ですが、今は一番初めの眼界から乃至の二字で中の十六界を略して無意識界としたので、これも亦空を離れてあるべきではないといふのが本文の意です、われ〳〵お互は此五蘊十二處十八界の爲めに迷はされて煩悶し苦惱して居るのであるが、見來れば一切皆空、我れを迷はす六境も迷はさるゝ六根も迷ふ六識もない、抑も何に迷ひ、何に迷はされん、

以上述べた五蘊十二處十八界のことを詳しくいふには五位七十五法のことを說かねばならぬ、五位といふのは色法、心王法、心所法、不相應行法、無爲法で、

此色法(色蘊)に十一ある、即ち眼耳鼻舌身の五根と色聲香味觸の五境とこれに無表色といふて形のない一種變態の色法を加へたのでこれは意の對境となるものとしてある、心王(識蘊)は即ち六識でこれを一つとし之れに從屬したものを心所法といふ受蘊、想蘊、行蘊は皆な之れで之れに四十六あり、皆な心に屬するが、別に不相應行法といふものがある、これは心王心所の如く心と相應せぬもので行蘊に屬するものを指したので非心非物のもの之れに十四、其の外に無爲法として生滅のないものに三ある。といふので合せて色法十一、心王一、心所四十六、不相應行十四、無爲三で七十五となるといふので詳しくいへばいろ〳〵説明せなければなりませんが今は凡て略して置きます、七十五法に對する一通りの説明は拙著「佛教要義」にありますが尙ほ七十五法名目といふ書物もありますからそれに讓っておきます。尙ほ唯識論では分類が異りまして心王を八(これは六の上に末那と阿賴耶が加はったので心所を五十一、色法を十一、不相應行を二十四、無爲法を六に分けて心のことを詳しく説明して居ります、これらも御參照になれば佛教が如何に心の研究に力を盡くして居るかといふことが御解りになりませう、これは略述法相義とか觀心覺夢抄などで大要が解ります。

無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡

これは十二因緣も亦空を離れてあるべきではないといふことを示したので、十二因緣といふのはわれ〳〵が此世の中に於て生老死の苦を受ける因緣を十二通りに説明したのでザット解釋すると第一が無明で眞理を眞理とせず非眞理を眞理として智慧の明を失ひ愚痴闇昧なる姿に名けたので愚痴を體とし迷暗を性と爲すとあつて惑即ち迷ひのことです、此無明が原因となつて第二の行を起す、行とは行業の義で此無明が本となつてさま〳〵な行ひをする、といふので、此二つが過去の業因となつて次きの世に生れ出た初一念即ち胎内に宿つたときと第三の識といふので、過去の惑(無明)業(行)によつて意識妄念の本體が母の胎内に宿つた、瞬間です、此瞬間は心の勢力が強くて了別の義があるから識と名けるといふことです、さて既に母の胎内に宿つたとすれば形骸もなくてはならぬ、これを第四の名色といふので識とはいふものゝ名ばかりでまだ智慮分別の働きをするのではないから心を名といふ色は即ち形ですが、未だ完全な身體が出來たのではない、第五の六入に至て身體が出來、眼耳鼻舌身意の六

が具つて終に出胎する、出胎して外界のものに觸れるこれを第六の觸といふ、これは生れてから三四歳の頃までを指したので、さて五六歳より以上になると觸だけではなく心性次第に發達して外界の苦樂を受けて辨知するやうになる、これが第七の受、其受け込むだ事に關して愛憎好惡の念を起すやうになるのが十六七歳で、これを第八の愛とし、それから以後此愛念の心いよ〳〵強くなつて一切の境界に對して執着を起し、所愛の境を取らんことを欲望するやうになる、これが第九の取です、此愛と取とは全く煩惱で、之れによりて善惡さま〴〵の業を造つて未來の果を招くのを第十の有といふ、愛取は惑、有は行です、かくて未來に生を受けるのが第十一の生、既に生とした以上は老衰して死なねばならぬ、之が第十二の老死であります、さて死ねばどうなる、死ねば前世の愛取有の業因によつて次ぎの世の生を引くといふやうに過去の無明と行とが本となつて現世の識、名色、六入、觸、受の果を生じ、これが又本となつて愛取有を起して未來の生老死を引くといふやうに輾轉して止るところがない、卽ち

過去の二因（業）
- 無明（惑）
- 行

現在の五果（苦）
- 識
- 名色
- 六入
- 觸
- 受

現在の三因（惑）（業）
- 愛
- 取
- 有

未來の二果（苦）
- 生
- 老死

といふやうに惑業苦惑業苦と連續して行くのが、われ〳〵お互の有樣で

業感緣起

あるとするのが小乘教の業感緣起論で、此老死の苦を斷たんには生を滅せなければならぬ、生を滅するには有取愛を斷たねばならぬ、愛取有を斷つには受を斷ち受を斷つには觸、六入、名色識を滅せねばならぬ、これを滅するには行を滅し行を滅するは無明を滅せなければならぬ、此無明をさへ滅せば行もなく乃至老死もなくなるのであるから生死流轉の根本なる無明を滅盡してしまへといふのであるが、今眞空の上からいへば無明行等の十二因緣もなければ、無明の盡きるといふこともなく、老死の苦もなければ老死の盡くるといふこともないといふので、無明だの無明盡だの、老死だの老死盡だのといふて居るのは未だ〳〵眞の悟りの境界ではない、眞空の天地に無明なく無明盡もない、永嘉大師の證道歌に

無明の實性

君不見、絕學無爲閒長人、不除妄想不求眞、無明實性卽佛性、幻化空身卽法身、法身覺了無一物、本源自性天眞佛、五陰浮雲空去來、三毒水泡虛出沒

と云はれたのも此道理で眞空の理を達觀した人から云へば除くべき妄想もなく求むべき眞もなく、無明の實體がそのまゝに佛性で、幻しの如き此身がそのまゝ佛の法身だ、五陰(五蘊に同じ)はこれ浮雲、貪瞋痴の三毒はこれ水泡である、眞空を離れて無明もなければ無明のなくなるといふこともあるのではない澁柿の澁そのまゝに甘乾となるが如く、煩惱卽菩提であるから厭ふべき生死もなく希ふべき涅槃もない、されば蘭溪禪師は

生死と涅槃

生死の二法は一心の妙用有無の二法は自性の眞德なり

といひ、道元禪師は

この生死はすなはち佛の御いのちなり、これをいとといすてんとすれば、卽ち佛の御いのちを失はんとするなり、これにとゞまりて生死に着すれば、之れも佛の御いのちを失ふなり、佛のありさまをとゞむるなり、いとふことなく、したふことなき、このときはじめて佛のこゝろにいる。

と云はれてある、こゝに無明もなく無明盡もなく、老死もなく老死盡も

なしとあるは此理に外ならぬ。

以上は小乘の中の緣覺の悟に就て眞空の理を示されたので次ぎは同じく小乘の中でも聲聞として佛の聲を聞て悟る人々の觀法に就て語られたので、

無苦集滅道

聲聞と緣覺

とある、聲聞は此苦集滅道の四諦の道理を佛の說きたまふを聞き分けて悟を開くので、先きの緣覺は十二因緣の道理を無上のものと思ひ、此聲聞は四諦を以て此上なきことゝ思ふて居るが共に小乘で未だ大乘甚深の理を知らぬ、今大乘眞空の上からいへば空を離れて十二因緣のなきが如く又四諦としてもあるべきではない。

苦諦集諦

諦といふは毘婆娑論に「諦とは實の義、眞の義、如の義、不顚倒の義、無虛誑の義」とありて眞理とでもいふべき意味に當るから四諦とは四個の眞理だと思へばよい、さて此四個の眞理といふは第一を苦諦といふて此世の苦なることを諦觀するので苦の上に苦を重ねる苦苦、樂變じて苦となる壞苦、生滅遷流の行苦あるのみか先きにもいふた四苦八苦がある、此苦抑も何によりて起るかといふに集によるので、これを第二の集諦とする、集は積聚の義で、われ〳〵お互は惑によりてさま〴〵な業を造る此惑業が積み重りて生死の苦を起すので、其惑には見惑と思惑との二がある、見惑といふは見は見解をつけて起す惑で貪るべからざるに貪り、瞋るべからざるに瞋り、迷ふべからざるに迷ひ、慢るべからざるに慢り、疑ふべからざるに疑ふので、さて之れは間違であつたと見解の上にわかつても、未だ心の中に遺つて居る惑がある、これを思惑といふので例へば穢多といふものは卑むべきものでないと解つても未だどうも卑しいやうに思はれるといふやうなのを指すのである、この見惑思惑によりて善惡の業を造るので、惡業とは五逆十惡の類をいふので、五逆とは

見惑と思惑

五逆十惡

一殺父、二殺母、三殺阿羅漢、四出佛身血、五破和合僧

で、十惡とは身三口四意三で

一殺生　一妄語　一慳貪

六道輪廻

身三（偷盜　邪婬）　口四（兩舌　綺語　惡口）　意三（瞋恚　愚痴）

をいふので、善業とは十惡に反對したる十善を行ふのです、これらのものは皆な集諦の中に收るのでこれが六道輪廻の本となつて苦を免るゝことは出來ないのがわれ〳〵お互の有樣です。

惡業によりて苦を招くことは解つたが、善業によりても尙ほ苦を免ることが出來ぬといふのは一見不思議のやうだが、こゝでいふ善業は比較的のものでわれ〳〵はこれらの善によりて比較的の樂果は得られるが、未だ絕對的の樂果を得ることは出來ないから少分の苦は免るゝことを得ないのです、佛敎ではわれ〳〵が生死の苦を受ける所を六つに分つて苦の極を地獄としそれより少しく苦の少きを餓鬼、其上が畜生、其上を修羅とし之れを四惡趣といひ、愚痴(地獄)貪欲(餓鬼)瞋恚(畜生)慢心(修羅)の結果として之れを四惡趣といひ、苦樂相半ばするを人間と

八正道

し、苦少くして樂多きを天上とし之れを六道といひ、此六道輪廻を免るゝのが小乘の緣覺や聲聞の目的です、

ツマリ惑業の集因によりて苦の結果を得たので苦諦は迷の結果、集諦は迷の原因をいふたので先きの十二因緣は此苦集二諦を詳しくいふたのに外ならぬのです。

かく集諦の原因によつて苦の結果を得たのであるから此苦を免れんには集諦を滅せねばならぬ、然らば如何にして此集諦を滅することが出來るかといふに、それには道諦を修せねばならぬ、此道といふに八ある、これを八正道といふので、

一　正見　宇宙の眞理を確信するの見解で邪見の反對です、

二　正思惟　思も惟もオモウといふ字で心の中の了簡を正しくするをいふのです、

三　正語　虛僞の言語を離れ妄語や惡口や兩舌の罪を犯さず、言語を正しくするをいふのです、

四　正業　身に行ふ所業を正しくするをいふので殺生偸盗邪婬等の惡行を離れるのです、

五　正精進　これは前の正思惟、正語、正業等を勉強してゆくことで精は精勤、進は進趣で努力勉勵のことをいひ、

六　正定　は正思惟を養ふ法で、定は禪定、心を落ち着け思慮を靜かにすること、

七　正念　これは正語の本で念が正しくなければ思はず邪語を吐くやうになるから心を正しくするの必要がある、

八　正命　は生活の道を正しくすることです、

この道諦を修して生死の苦を免れて涅槃の樂を得やうとするのが聲聞の希望で、滅諦といふは其涅槃の境涯で、此樂を得んが爲めに道を修するので、滅は悟の結果、道は悟の原因といふことが出來ます、此聲聞方即ち小乘教の望む所は生死の苦を離れて寂滅の涅槃を得やうとするのであるが、こゝには此四諦も空なりと喝破したので、空を離れて四諦も十二因緣も存すべきではない。

水鳥の行くもかへるもあとたえて
されども道は忘れざりけり

此歌意を了して初めて眞空妙有の理を知つたといふことが出來るのです否な

無智亦無得

で、此空理を知つたといふ智もなく、其又空理といふものもあるべきではない、即ち上來五蘊も無い十二處も無い十八界も無い十二因緣も無い四諦もないと說き來ると成る程かゝるものは皆な空であると知つた智慧だけはあるかといふに此能照般若の智もなく、又有難い悟とでも思ふて居る所證所得のものがあるかといふにそれもあるべきではないといふので、賢首大師の略疏には

唯空の中に前の諸法なきのみに非ず、彼の空を知るの智も亦不可得な

り、故に無智といふ、即ち此の知る所の空理も亦不可得なり、故に無得といふ

とある、智だの得だのといふて居るのは未だ差別に迷ふて居るので悟つたなぞといふて居る中は未だほんとに悟つたのではない、未だ心の中に悟といふものが塊つて居る、或る僧が靈雲和尚に向て直に純清絶點を得る時如何と問ふた。純清絶點とは明鏡に一點の塵がないやうなので、今我心に一點の塵なし、此時これ悟といふものかといふのだ、所が和尚は喝破して猶ほこれ眞常の流注とやつた、其事の流注といふのは迷ひだといふことだ、ソコデ其僧が「如何なるかこれ眞常の流注」と反問した、これをしも何故迷ひと仰るかといふのだ、和尚は直に答へて「鏡の長へに明かなるに似たり」といふた、それは悟の鏡が明らかだぞといふのであるから、僧は更らに然らば之れ以上のことでもござるかと「向上更らに事ありや」と和尚は平氣で「有り」と答へたから、僧は急き込むで「如何なるか是れ向上の事」といふと、和尚は「鏡を打破し來れ、汝と相見せん」といふたといふ話頭

がある、絶點純清の悟があると思ふたのは未だ迷ひを離れたとはいへぬ、佛法だとか悟だとかいふたからとて別段異つたことがあるのではない、昔、須菩提尊者、釋尊の御弟子の中で解空第一とて空の道理を知ることこの上もない御方であつた、或る時巖中に坐禪をして居られると帝釋天が花を降らした、ソコデ須菩提が、何の爲めに花を降らすかといふと、帝釋が尊者般若を說くが故に花を雨らしてこれを讚嘆するといふた、須菩提は我未だ一字を說かず汝何故に讚嘆するやと答めた時に帝釋は尊者無說、我無聞、無說無聞これ眞の般若にあらずやといふたといふ話がある。

六　得益

以無所得故

これは前を承けて後を起す語で、既に智もなく得もないといふた、此無所得の所に大所得があるといふ利益をこれから說明せられるので、此無

所得といふのは何にもないといふのではない、實相般若の鏡明かに森羅萬象の影を映して少しも汚さるゝことなく、一法一切法を顯はし一切法一法にして一々の法、法界の全體に亙るを指したので、般若の妙用こゝに現はれ應用無礙なることが出來るのである、「註心經」には

普照寂滅一法として得べきなき菩提なり、諸法の不可得を了得するを菩提薩埵と名く

とある、無所得の所、これ大所得だ。道元禪師の支那に入りて佛法を正傳して歸られた時に、

空手にして鄉に還る、毫も佛法なし、唯だ眼横鼻直なることを認得す、日は朝々東より出で、月は夜々西に沈む、鷄は五更に向て鳴き、三年一たび閩に逢ふ

と、此空手にして鄉に還るといふ所に大なる土產があつたのではないか、有所得には限があるが無所得の境には限りがない、限りのない所得はこれ無所得、此無所得を以ての故に

空手還鄉

菩提薩埵、依二般若波羅密多一故、心無二罣礙一

無罣礙

一體此無所得といふことは餘程面白い語で、何事をするにも有所得の念を以てしたものは完全なものとはいはれぬ、何か報酬を得やうとしてやる慈善事業は眞の慈善事業ではないが如く、親に孝を盡くし、君に忠を盡くすのでも其爲に何かを得やうとしてはそれは眞の忠とも孝ともいふことは出來ぬ、眞忠は忠を忘る念々これ忠、眞孝は孝を忘る念々これ孝で、別段改まつてこれが忠でございい、これが孝でございといふ間は心に罣礙として何かこだわりさわる所がある、罣といふのは糸などに縺れかゝつて障つたやうなので礙といふのは道に石などがあつて足にわたつてさわつたやうなので、解し易くいへば何か心にわだかまりがある、それでは未だ眞の忠とも孝ともいへるのではない、楠正成の歌に

身の爲めに君を思へば二た心
君の爲めには身をも思はじ

心は虚空の如し

といふのがある、卽ち身を忘れ我れを忘れ物を忘れ境を忘れる無所得でなければならぬ。

ソコデ菩提薩埵卽ち菩薩は此般若波羅蜜多に依るが故に心に罣礙なしといふたので、無所得の大所得は聲聞や緣覺の如き小乘の悟のものゝ得るべきではなく、これは大乘の菩薩と佛との得る所であるから、こゝに先づ菩薩の得果を擧げたのです、菩薩既に深般若の妙行を修するが故に心を礙する煩惱障なく、智慧を礙する所知障もなく、一切の繫縛を離れて、心の大なること虛空の如く能く如何なるものをも包容し、心の明なること鏡の如く能く何如なるものをも映すことが出來る、これ全く無所得の大所得で、少しでも心に物があつては何物をも容れ何物をも映すことは出來ぬ、丁度座敷さへ掃除をして置けば、どんな御客があつても驚かぬが、散らばつて居つては、來客毎に大騷ぎをせなければならぬやうなものだ既に些の罣礙なし、

無罣礙故無有恐怖遠離一切顚倒夢想

で、外からわれ〳〵を惱ます魔怨の恐れもなく、內には惑障の顚倒夢想を離れるといふので、魔といふのは梵語で魔羅(Māra)支那に譯して奪命又は殺者といふ能くわれ〳〵お互の智慧の命を奪ふとの意です、これに四ある、

一　蘊魔　五蘊積聚して生死の苦果を成し此生死の法能く智慧の命を奪ふこれを蘊魔といふ、

二　煩惱魔　一切の煩惱はわれ〳〵の心を惑亂して菩提を妨ぐるからこれを魔といふので、

三　死魔　修行の人此死の爲めに慧命を續延することが出來ない、

四　天魔　此魔は修行の人を苦め出世の善根を妨げ生死の緣となるをいふのです、

要するに魔といふのはわれ〳〵の心を汚す惑業苦を示したので、今深般

四顚倒

若によつて心に罣礙がないのであるから是等のものによつて惱まさるゝ者ではない。顚倒夢想といふのは上來しば〳〵述べた煩惱障所智障を指すので、眞空の理に迷うて虛妄の法を實有なりとして執着すること猶ほ夢中に虛を認めて實とする樣なものであるから之れを顚倒夢想といふたので、此顚倒にも亦四顚倒などの說がある、四顚倒といふのは皆な人我の見を執するから起るので此無常の身を常住なりと執する常顚倒、皆苦の世を樂と執する樂顚倒、無我の身を我ありと執する我顚倒、垢穢の身を清淨と執する淨顚倒等で眞空の理を見究めた菩薩方は既に業に遠くこれらの顚倒夢想を離れて居るのである、斯くの如く內外に恐怖なく顚倒ないのは全く無所得の大所得で、眞空妙有の活用であります。「猫の妙術」といふ書物に劍道の極意を說て、

心氣和平にして物なく、潭然として常ならば變に應ずること自在なるべし、此心僅に物ある時は狀あり、狀ある時は敵あり、我あり、相對して爭ふ、此の如きは變化の妙用自在ならず、我心先づ死地に落入て

心內無物　劍術の極意

靈明を失ふ、何ぞ快く立て明かに勝負を決せん、たとひ勝ちたりとも盲勝といふものなり、劍術の本旨にあらず、無物とて顏空をいふにはあらず、心もと形なし、物を蓄ふべからず、僅に蓄る時は氣も亦其處に倚る、此氣僅に倚る時は融通豁達なること能はず、向ふ所は過にして向はざる所は不及なり、過なる時は氣溢れて止むべからず、不及なる時は餒て用をなさず、共に變ずべからず、我所謂無物といふは不蓄不倚、敵もなく我もなく、物來るに隨ふて應じて迹なきのみ、易に曰く無思無爲、寂然不動、感而遂通天下之故と、此理を知て劍術を學ぶものは道に近し

とある、心に罣礙なきが故に物來るに隨ふて應じて迹なし、何の恐怖あり何の顚倒かあらむ、澤庵和尙又劍道の奧義を語つていふ、

敵の身に心を止むれば、敵の身に心奪はれて吾に隙を生ずべし、敵の刀に心を止むれば、敵の刀に心奪はれて吾に隙を生ずべし、此の如きが故に敵にも吾にも心の置所なし、心の置所果して如何、或は曰く心

は宜しく臍下丹田に收めて暫くも放つべからず、只敵の働きによりて轉化せよと、若し此の如く臍下に收めて置かんとすれば、茲に心を奪はるべし、さりとて放心したらんには敵の及を受け難かるべし、然らば如何にして此心を置くべきといふに、心はいづくにも置くことなかれ、これ實に敵に對する最大要心なり、

と、既に恐怖なく顚倒なし、我が心は安く我が體胖なり、かくて

究竟涅槃

これを究竟して涅槃すとの讀み方もある、いづれにしても涅槃を究竟することが、涅槃といふのは梵語(Nirvana)で支那に譯すれば寂靜といふ意であるが、此涅槃にも小乘の方の見かたと大乘の方の見かたとは自ら其趣を異にして居る、小乘の方では生死の苦を離れて灰身滅智と丁度火の消えたやうに寂かな境界をいふのですが、大乘の方では圓寂の義として圓はマドカで少しの缺けめのない圓滿な姿で寂はシヅカで物事の動き變

らぬ形であります、萬德備はらざるなきを圓といひ、惑障盡きざるなきを寂といふて十五夜の月、一點の雲なき形で、眞善美悉く現れて俗惡醜の影はない、究竟の究はキハマリ、竟はオハリで此涅槃を究め盡すといふことです、涅槃といへば又涅槃といふことに迷ふかも知れぬが、涅槃といふたからとて別のことではない、われ〳〵の本來持て居る天然の性德です

これには法身、般若、解脫の三德を具へて居る、法身といふは諸佛にあつても增さず、衆生にあつても減ぜない涅槃の德で、衆生は常樂我淨の四に就て顚倒妄想を起して居るが、佛は之れに自在を得て、常と永久、樂と安樂、我と獨立、淨と清淨である、正にこれ宇宙の眞理、般若といふのは諸佛は諸法の理を覺了して平等無二、清淨無相、不增不減である智慧をいひ、解脫の解は不繫とて繫がるゝことなく、脫は自在で一切業累を離れて大自在を得て居るのをいふので此三は火に燒める燒く明かといふ三の作用があるが如く涅槃の三德です、

三涅槃

尚ほ此の涅槃に就ては金光明玄義に三涅槃の說がある、

一　性淨涅槃　諸法實相の理は染すべからず淨すべからず、不染は卽ち不生なり、不淨は卽ち不滅なり、不生不滅を性淨涅槃と名く

二　圓淨涅槃　智極るが故に圓と名く、惑盡くるが故に淨といふ、智、理に契へば惑畢竟して生ぜず、智畢竟して滅せず、不生不滅を圓淨涅槃と名く

三　方便涅槃　猶ほ善巧の如きなり、智能く理に契へば卽ち群機を照らす、照らせば必ず應を垂る、機感ずれば生ず、此の生、生にあらず、機緣既に盡くれば應身卽ち滅す、此滅、滅にあらず、不生不滅を方便涅槃と名く

とある、大乘の涅槃は活動的で決して死滅的のものではない、此本來自性淸淨なる涅槃を究竟して應用自在なるのが菩薩の働きである。これから諸佛の得益を示すので、

三世諸佛、依般若波羅蜜多、故得阿耨多羅三藐三菩提

といふ、三世といふたのは過去、現在、未來を指すのでツマリ無限の時間といふことです此の下に十方といふ字を加へれば無限の空間を指すことになるので十方とは上下四方四惟で、三世十方といへば時間的にも空間的にも無限で此宇宙全體をいふことゝなるが、今はしばらく時間のみを擧げて三世といふたので、其意は空間をも含むで居るのです佛といふのは梵語で佛陀、支那に譯して覺者といふので煩惱迷妄の夢覺めて心地の明月皎々として照り渡るお方を指すので、先づ煩惱の繫縛がほどけた御方と俗解して居つても大きな誤はない、此覺に自覺と他覺と二があつて唯自身が悟を開くのみならず他をも覺らせて、こゝに覺と行と圓滿してゆくので、往古來今自覺々他の爲に盡された覺者は數限りなくあるが、皆な此般若波羅蜜多によつて此くの如き位に入られたので、阿耨多羅三藐三菩提といふのは梵語で、阿は無、耨多羅は上、三、藐は正、三を等、

菩提を覺と釋譯して無上正等覺といふ、卽ち此上もない正眞平等なる覺りといふて宇宙の大道、天地の眞理を覺るといふやうな意味に當る、この覺を得て佛になるには此般若波羅蜜多に依るの外はないのである、さ

無上正等覺

ればこそ大智度論には

般若は是れ十方三世諸佛の妙法にして一城門の如し、四方より來る者、門を異にして入ることなし

般若の一門

とある、まことにこれ深般若の法藏は諸佛成道の母で佛道に入るには此道に依るの外はない、悲哉、吾等は無始劫來般若の智眼を昧まして人我の見に迷ひ法執の垢消えず迷ひに迷ふて居るので佛は之れを憐みて、こゝに諸佛菩薩成道の遺跡を示されたのである、佛敎各宗各派さまゞに分れて念佛だの題目だの坐禪だの觀法だのと各其主張する所は異るが所詮の目的は此の般若の眞智を開發して阿耨多羅三藐三菩提とてさとりの道を得せしむるの方法に過ぎないのであるからこゝに至ては何宗何派だのといふ異があるのではない、宗派の各別は皆な此同じ高根に上らんとする道の相違で、一つの富士の山でも吉田口から上るものもあれば大宮口から上るものもあるといふやうにそれは互々の機に應じて便利を選ぶので分け登る麓の路に異があつても到り着くのは此般若の門で、こゝからは直に頂上の奥院だ、

陀羅尼

故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪是無上呪

是無等々呪

と云はれたので、故に知るは前を承けて後を起すで、呪といふのは印度の語で陀羅尼といふのを支那に義譯したので、此陀羅尼といふのは能持と總持と遮持との三義を含むで居るので一語に譯することが出來ぬから多くは原語のまゝ陀羅尼といひ、義譯して眞言ともいふので總持といふのは善を持して失はず、惡を持して生ぜざらしむるからで、遮持といふのは空有二邊の惡を遮して中道の善を持するからで、又能持といふのは

種々の善法を集て持して失はざらしむるといふ意があるので、今は之れを咒と譯したので全く意譯です、今此般若波羅蜜多に無量無邊の功德を有して居るのは總持、能持で、能く空有二邊の惡を遮して居るのは遮持で、此般若波羅蜜多そのまゝに陀羅尼であるといふので其功德を四通りに述べて先づ第一に大神咒なりといふた、大神咒とは魔怨を降伏する大威神力を以て居る咒文であるといふので、心に罣礙なく恐怖あることなく、既にもろ〳〵の煩惱を遠離するのが般若波羅蜜多であるから大威神の力を持て居るといふことが出來る、大明咒なりとは菩提の源底を盡くして障ることなく智慧の光明赫々として愚痴の暗を破る般若の德をいふたので、無上咒とは宇宙の眞理を現はすこと此の上もないので、單に上といへば下より見てこそ上なれ、其上からは上とは云はれぬ、が、今は其上となるべきものがない、究竟して上なるが故に無上咒といふたので、無等々咒とは之れに等しきものゝないのと等しいとの意で此般若は大乘甚深で他に等しきものなし此理を徹底せられたる佛は又最尊無上で等し

咒の四德

きものはない、其等しきものゝない佛方と等しくなるのが此般若波羅蜜であるから無等々咒といふたので、先きの無上は竪に示し無等は横にいふたのでツマリ佛と等しくなることも之れに外ならぬ、般若の功德實に大なる哉だ、そこで

能除一切苦眞實不虛

と結ばれた、此くの如く功德廣大利益無量なる般若であるから能く一切の苦を除くで、之は四苦八苦分段變易の生死等其他世間出世間の魔障災害といふので、これらのことは既に講述したから今は繰返すまでもない、眞實にして虛ならざるは般若の妙慧の功德を決定したので最も力ある文字です、天桂禪師は

從上の所說を信得及し體得徹せば一切世間の苦は云ふに及ばず、佛縛法縛をも脫落すること眞實にして虛妄なし、如是、如來叮嚀の告誡、信ずべし行ずべし

理と信

と云はれた、上來はいろ〳〵と理屈の上から般若を證明し、こゝに至て眞實にして虛ならずといふ、これ信を呼ぶの聲なり宇宙の眞理實に是の如くにして一點の虛僞なし、吾等は唯だ信ずるの外はない、先づ理論を說きて信仰に及ぶ眞の信仰は理を離れず、理の究まる所こゝに信仰あるはこれ佛敎の哲學と其趣を異にし、又他の背理の信仰と其選を異にして居る所であります、如上の理、高尙幽遠こゝに於て次ぎに唯だ信のみを示す秘密の說がある。

顯了般若と秘密般若

七　秘　密

これからが密敎の部分で、以上述べ來つた所を顯了般若といひ、これから下を秘密般若といひます、顯了般若といふのは大聖釋迦牟尼佛が一切衆生の迷妄を憐みて懇切に般若皆空の理を敎へ示めされたので、秘密般若とは唯佛のみ能く知りて他人の通解することの出來ない秘密の咒文で、其理を解せずとも之れを誦持する功德によつて惑障を斷ずることが出來

秘密の德

るといふので、弘法大師は此秘密の德を賞へて

眞言は不思議なり、觀誦すれば無明を除く、一字千理を含み、卽身に法如を證し、行々して圓寂に至り、去々して原初に入る、三界は客舍の如し、一心はこれ本居なり

と云はれてある、上に大神咒大明咒無上咒、無等々咒とはいふたが、未だ秘密般若の咒が示してない、ソコデ

故說般若波羅蜜多咒

で、此咒は如何なるものかといふに、

說咒曰揭諦揭諦波羅揭諦波羅僧揭諦菩提薩婆訶

です、これはどんな意であるかといふに、古來咒文は飜譯さないのを以

て正軌とするのでこれには五の理由がある、一は呪は諸佛の密語で唯佛と佛との能く領知したまふ所で未だ其位に至らぬものゝ解すべきものでないから、唯だ之れを信誦すればよいといふので、二は呪は義理甚深にして一々の字句に多義を含むから飜譯すれば其義を失ふ、三は呪中には鬼神の名があるから飜譯することが出來ない、四は呪は諸佛の密印で、之を飜譯すれば其威神を損ふ、五は呪は諸佛菩薩の不思議力の加持する所であるから唯だ誦持するを妙とすといふので、第二の理由の外は正當の理由とすることが出來ない、昔は何れの宗敎もこんなことをいふと解らぬから有難いなぞといふたが、そんな理由はない、併し多義を含んで釋譯することの出來ないといふのは事實で、先づ初めの揭諦（ギャティ）といふ語にも去と度との二義あつて去といふのは迷ひを除き去るの意、度といふのは波羅蜜と同じく苦海を渡つて悟りの岸に至るといふことで、揭諦揭諦と重ねたのは初めのは己れ自から迷を去りて苦海を渡る自度、次ぎのは他を敎へて迷を去り苦海を渡らしむる他度で、此揭諦揭諦の二つで自利

呪文不飜の理由

呪文の意義

利他が圓滿になり、波羅揭諦の波羅は彼岸の義で迷を去り苦海を渡りて到り着く涅槃の岸で、波羅僧揭諦の僧は總てとか普ねくといふ意で自他普ねく度し總て悟りの彼岸に到ることです、菩薩は毎度申す菩提卽ち度脫して般若の道に契合する大道で、薩婆訶（ソワカ）は速疾と成就と究竟と滿足との四義があつて、ツマリ前に述べたる法を速に圓滿に成就し竟るといふことで、直譯すれば度、々、彼岸度彼岸普度、覺、成就といふことで、

意譯

意譯すれば

「我れも渡れり、人も亦、渡らせ畢んぬ、彼の岸へ、
あまねく渡らせ了りたり、かくてさとりの道なりぬ」

といふことになる、天桂禪師は此呪に就きて

これ無等等の活句なり、直下に鷹取せば汝が本參の話頭なり、謂ふべし、世尊密語あり、迦葉覆藏せず、此呪有飜無飜の兩義あり、古來注家の譯解もあれども、彼の此の、と理屈を着れば死句となつて汝が出氣の分なし、痛しい哉、劍去て舟を刻むもの多し

去劍刻舟

と云はれてゐる、何の彼のと此咒を講釋するのは舟の中から劍を落して、こゝから落ちたと舟にしるしを刻して居るやうなもので、そんなことで劍を探したからとて得られるものぢやない、といふので、私共の不學淺才で此咒文を解釋するのは劍去て舟に刻すの類であらうが、無暗に解らぬことを解らぬまゝに誦するにも及びませぬで、こゝに其大意を示したので、丁度或る人が書師に蹈花馬蹄香しといふ畫を描いて呉れといふた折りに、どんなに考へても其香しといふことを示すことが出來ぬで馬の蹄の所に飛んで居る蝶を描いて其意を示したといふことである、私の此咒文の解釋も馬蹄に蝶を描いた位に過ぎないが、これによつて其一字千理を含むといふ咒文の如何なるものなるかを御會得下されば幸ひです、

顯と密

此經は僅かな字數であるが其中に顯密二教に渡つて居るので顯その中に秘密の意あり、顯密の中に顯その意を含む、玄門和尚いふ、

陳間齋が春日の詩に朝來庭樹有鳴禽　紅綠扶疎春上遠林　偶有好詩生眠底　按排句法已難尋

といふがある、初の二句は風光をいふ顯說の如し、

其中に、密咒が浮びたる故に詩を作らんと思ひたれども尋ね難しとて止めたるなり、佛は顯說の中に密說浮びたり、故に咒を說くといひて般若の密咒をなしたまへるなり、王摩詰は詩人にして而も畫をよくせり、東坡之れを褒めて王摩詰は詩の中に繪あり、繪の中に詩あり、といふと同じく顯說の中に密咒浮べり故に咒を說きたまふなり、

と、顯中に密あり密中に顯あるのが此經の妙ですから顯密いづれを勝れりとするのでもなく、其機根に應じて或は智解し、或は信誦し以て此諸佛菩薩の妙法を究めて戴きたいのです、賢首大師心經略疏の絕筆述懷の頌にいふ、

般若深邃　累劫難逢　隨分讚釋　冀會眞宗　有緣披讀　妙理無窮　修行至極　果滿方終

と、不學淺才の私が此甚深の般若を說いたのでありますからもとより其萬分の一をも示すことが出來ないのでありますが、若し之が緣となつて此の妙理を盡くしたまふの楷梯となることが出來れば幸ひであります、

般若の性德遠きにあらず、妙慧の眼を開て見れば宇宙萬象其德を顯はさざるはない、要は看る人の心にあるのです。已に見る人の心にあり、密といへばこれより密なるはなく、顯といへばこれより顯なるはない、人我の見を破つて心中の秘佛を開き以て宇宙を達觀せばいづれか之れが道にあらざるべき、要は人々の體得にあるのです。

『願くは此功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成せん、南無十方三世一切常住三寶、哀愍して護念したまへ』

通俗

心經講話了

夾山無碍禪師降魔表

夾山無碍禪師降魔表

臣聞。三乘路廣。法界無涯。智海晏清。十方安泰。時有魔軍。競起侵撓心田。六賊既强。心王驚動。朝生百恠。暮起千邪。撼惑眞如。困勞法體。菩提道路。隔絶不通。破壞涅槃。傷殘三寶。無爲珠玉。悉被偷將。大藏法財。皆遭劫奪。塵勞翳日。欲火亘天。飄蕩法城。焚燒聖境。臣乃見如斯暴亂。恐佛法以難存。遂與六波羅蜜。商量。同爲剪滅。遣性空爲密使。聽探魔軍。見今屯在五蘊山中。有八萬四千餘衆。既知體勢。計在刹那。遂點十八界雄兵。並立體空爲號。人人有無礙之力。箇箇懷勇健之能。直心爲見

性之功。一正去百邪之亂。擐堅固甲。執三昧鏘。智箭禪弓。光明慧劍。向大乘門中訓練。寂滅山內安營。三明嶺上開旗。八正路邊排布。遣大覺性。爲捉生之將。游歷四方。搜索妄想之踪。抄截無明之蹟。復使慈悲王破三毒之塞。忍辱帥伐嗔怒之城。精進軍除傲慢之妖。喜捨士捉慳貪之賊。逡巡而魔軍大起。殺氣衝天。臣乃部領摩訶。一時齊入。當爾之時。眼不觀色。耳不聽聲。鼻不嗅香。舌不了味。身不受觸。意不攀緣。一志向前。念念不退。倏忽而魔軍大敗。六賊全輸。殺戮無邊。掃除蕩盡。生擒妄想。活捉無明。領向涅槃場中。以慧劍斬爲三段。煩惱林

當時摧折。人我山化作微塵。癡愛網遭智火焚燒。邪見林被慧風吹竭。因茲三明再朗。四智重圓。內外無瑕。廓然清淨。心王坐懽喜之殿。眞如登解脫之樓。自性遊無碍之堂。三身踞法空之座。從茲法界寧靜。永絕囂塵。共渡生死之河。齊到菩提之岸。魔軍既退。合具奏聞。

通俗降魔表講話

心經に續いて降魔表のお話をして見よう、降魔表といふのは、支那の夾山無碍禪師といふ人が作られたと傳へられて居るが、此人の傳記は傳へられず、又如何なる人であるかといふ事も分らぬけれども、碧巖集の著者圜悟禪師といふのが、支那の濃州の夾山の靈泉院に居られたし、且此の降魔表が、碧巖集に載せられてあるから、多分圜悟禪師の作であらうといふのである、表といふのは臣下が天子に奉つるの文體で、是は將軍が戰爭の結果を天子に報告するやうになつて居る、魔といふのは梵語で摩羅(Māra)といふ、支那に譯すると奪命、又は殺者といふ義で、智惠の命を奪ひ、智惠の命を殺すところのものをいふ、即ち煩惱、迷ひのことである、我々の心の中にある此煩惱の惡魔を降魔した結果を天子に報告するの文體に擬して作られたのが此の降魔表で、文章は簡短であるけれ

魔の字義

三乘

ども、我々が精神修養の順序を示した、頗る愉快な文體である、冒頭には、

臣聞、三乘路廣、法界無涯、智海晏靜、十方安泰、

臣聞く三乘路廣うして、法界涯りなし、智海晏靜にして、十方安泰なり

と筆を起してある、臣聞くといふのは、即ち將軍が天子に申し上げる表の文體で、三乘といふのは、菩薩乘、聲聞乘、緣覺乘の三つで、乘は運乘の義で、迷の岸から悟の岸に渡す乘物に喩へたので、我々が煩惱の迷の岸に居るものを、悟の岸に移すのには、三つの乘物がある、此中聲聞乘と緣覺乘とは小乘というて、自分一人悟ることを主として他を悟らせるといふ事を考へないのであるから、自分さへ悟りの岸に行けば宜いといふ、丁度自轉車のやうなものであるが、菩薩乘といふのは、自分ばかりが悟の岸に渡るのみでなく、他の人々をも渡さうとするのであるから、

汽車や汽船の如きものである、故に是を大乘というて居る、大乘と小乘は佛敎の二大區別で、夫を更に分けて、小乘の方を聲聞と緣覺にするから三つとなる、玆に三乘とあるのは、佛敎全體を指したものであると思うて差支へはない、抑〻佛敎の道理といふものは、我々をして迷を轉じ、悟を開かせるといふので、其の元は宇宙の道理を達觀し、人生の歸趣を定めて行くといふので、廣大無邊、竪に三世とて、過去、現在、未來、横に十方とて東、西、南、北、東南、西南、東北、西北の八方、更に上下を加へて量を十方といふ、即ち無限の空間に亘り、無限の時間に亘つて居るところのものであるから、悟の岸に行く道は廣うして、佛法の境涯は涯りがない、智海晏靜にして十方安泰なりといふ、所謂時つ風枝も鳴らさぬ大御代で、智惠の海が靜かに、十方は實に安泰なり、我心に一點の迷もなく、本來本法性、天然自淨心、本から有つて居る我々の心は、實に限りなく淸く曇りなき立派なものであつたのである、といふことを形容したのである、是までは天下泰平の形である。

時有魔軍、競起侵撓心田、六賊既强、心王驚動、朝生百恠、暮起千邪、撼惑眞如、困勞法體、菩提道路隔絶不通、破壞涅槃、傷殘三寶、無爲珠玉、悉被偸將、大藏法財皆遭劫奪、塵勞翳日、欲火亘天、飄蕩法城、焚燒聖境、

時に魔軍あり、競ひ起つて心田を侵撓し、六賊既に强く、心王驚動し、朝に百恠を生じ、暮に千邪を起し、眞如を憾惑し、法體を困勞し、菩提の道路隔絶して通せず、涅槃を破壞し、三寶を傷殘し、無爲の珠玉、悉く偸將せられ、大藏の法財皆な劫奪に遭ひ、塵勞日を翳して、欲火天に亘る、法城を飄蕩し、聖境を焚燒す。

さあ如斯き泰平無事の時、時に魔軍ありで、此の清淨潔白の心の上に忽然として迷ひの雲が起つて、月の如き靈光は全く昧まされて、泰平無事の心の田は侵される、是からが愈ゝ魔軍の跳梁跋扈する有樣を述べたのである、時に魔軍ありが、餘程面白い、吾等が何とも思はずに居る折は、別に迷ひもなく悟もないのである、昔磐珪禪師といふ人があつた、或人は其の禪師に向つて、私は生れつき癇癪持ちで困る、何とか治す法はござるまいかといふと、禪師が夫れはどうも面白いものを生れ附かれた、一寸此處で出して御覽なさいといふと、其の人が、今というて今別に癇癪を起すやうな事はございません、そんなら何んな時に出るのかと禪師が問ふと、いえ、ひよつとすると出ます、ひよつとすると出るといふのでは本から持つて居るのではない、自分の心で起すのである、本から持つて居るのは、本來清淨なる本性ばかりぢや、夫を自分勝手に癇癪を起し、短氣を起して、親が生み附けて呉れたやうに、私は生れつき癇癪持ちでござるなどゝいふのは、以ての外の親不孝であると、叱られたといふ話がある、ひよつとすると起るは此魔だ、此の煩惱ぢや、是が今非常なる

勢ひで心田を侵撓し、心の田を侵し撓して、其心の田を侵す所の六つの賊といふのは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つをいふのである、此内の五つ、即ち眼耳身舌鼻は外界から來て我等の心を動かし、後の一つの意は内部から我々の心を動かす、内外相應じて我が心常に愛欲の念や憎惡の感がいよいよ募つて、心王を驚動して居る、其の心の迷ひの狀態といふものを形容すると、朝に百怪を生じ、暮に千邪を起す、百千の怪しきもの邪まなるものが眞如とて、眞實如常、即ち此の當然に見ゆべきものも當り前に見えずに、眞理の光を影暗くしてしまふ、一體人間といふものは、眞實如常の當り前の事を、是の事が如是に見ゆれば迷ひはないのであるけれど、却々如是の事が如是に見る事が出來ず、よく禪宗の師家が其弟子に汝、『二人行く一人は濡れぬ時雨かな』是を考へて見よといふ、二人行き一人は濡れぬ時雨かな、何ういふ譯であらうか、二人行くならば二人ながら濡れなければならぬ、二人行き一人濡れるといふ譯がと、段々其所へ頭を入れて考へれば考へる程分らぬ、一つ頭を出して考へて見ると、二人行き一人は濡れぬといふのであるから、ナニ二人ながら濡れるといふ事だと、當り前の事が當り前に見る事が出來るのである、といふやうな事をいふが、其の通りで一度頭を岐路に入れると、迚も出る事が出來なくなつて了ふ、今は煩惱が盛んに起つて居る姿であるから此の迷ひの方へ向いて如是のものが如是に見えずして、法體を困勞して、法性の體が現はれる事が出來ぬ、吾々の心といふものは、全く妄念妄想の跳梁跋扈に任せて、菩提とて正しき途は隔だつて了つて通ぜなくなつて了ふ、夫であるから終に善心に立ちかへる途がなくなる、正にこれ鐵道が破壞せられて電線は切斷せられ、味方との間には通ずべき途がないといふの狀態だ、魔軍の勢ひ斯くの如くして、涅槃の都とて眞善美の圓滿具足なる境界を全く潰されて、敎への力となる所の、佛、法、僧の三寶、三つの寶は傷け破られ、人々個々ゆたかに具へて居る所の佛性、即ち本來の立派な性質の寶は偸み去られて了ふ、吾々が修養を助くべき大藏といふのは、佛敎の經典で、其の經典の中に入れられたる多くの法の

寶は、劫奪というて奪ひ去られて、聖人の敎は知るに由なく、涅槃の都へ行く事は出來ず、塵勞とて、塵に喩へられる煩惱は盛んに起つて黑雲重疊日月爲めに其の光を失ひ、心の本體は全く其の輝きを見せない、愛欲の火は熖々として天に漲り、味方の領土である法域は魔軍の大勢に靡かされ、聖人の境界といふものは全く焚き盡くされて了ふ、如斯くにして惡を犯して惡の惡たるを知らず、墮落に墮落を重ねて、終に救ふべきの途もないやうになつて行く、實に吾々が墮落の徑路は如斯くにして一念惡に向ふのである、初めは線香の火のやうな微かなものであるけれども、終に我が良心を燒き滅ぼして了ふ、今の魔軍の狀況は此くの如きもので惡の極に達して居るのである、敵の勢ひ此くの如くであるから、味方も又夫れに對する戰鬪準備を仕なければならぬ、其處で。

臣乃見如斯暴亂、恐佛法以難存、遂與六波羅密商量、同爲剪滅、遣性空爲密使、聽探魔軍見今屯在五

蘊山中、有八萬四千餘衆、既知體勢、計在刹那、

臣乃ち斯くの如きの暴亂を見て、佛法以て存し難きを恐れ、遂に六波羅密と商量し、同じく剪滅せんとし、性空を遣はして密使と爲し、魔軍を聽探し見るに、今五蘊山中に屯在して、八萬四千の餘衆あり、既に體勢を知る。計刹那にあり。

臣乃ち、私はそこで此の魔軍の跳梁跋扈の有樣を見まして、是ではならぬと反省一番して直ちに魔軍の討滅にかゝる事に致しました、先づ第一に協議を凝らしたのは吾等の腹心である所の六大將軍である、是を六波羅密といふ、波羅密といふのは梵語で、支那に譯して到彼岸の義である、即ち迷ひの岸から悟の岸に渡る舟筏となるべきものである、此の六つといふのは、第一は布施、布はしく、施はほどこす、此世の中は互に施し合ひ、惠みあつて居るものであるから、吾等も又他の爲めに施し、惠まなければならぬといふ慈善の義で、次は持戒、佛の戒めを守り、聖賢の

教訓を守り、宇宙の規律を重んじて行くといふ事、戒は防非止惡の義で、一切の惡は斷じて行はぬ、一切の善必ず是を行ふといふ事である、第三は忍辱、忍辱といふのは即ち忍耐の義、惡を止め、善をなすと共に此の忍耐の心で『たゞしのべ人の人たるみちのくのしのぶのほかに途あらめやは』堅忍不拔なる精神を持するにあらずんば何事も出來ない、第四が精進、精進は精はくはしく、進はすゝむで、奮鬪努力の義である、豈余を妨ぐるアルブスあらんやといふ勢ひで進んで行く、第五は禪定とて靜思熟慮の義である、ものを宜く考へるといふ、鼻先思案や、咽元の考へでは間違ひが起る事が多いのであるから、靜思熟慮し宜く考へてものをするといふことである、其の考へたる心から出た智慧が、即ち正しき智慧、此の布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、是を六波羅密といふ、是が皆迷ひを去り悟につくの總指揮官である、此等の指揮官と共に開かれたる參謀會議の結果は、先づ敵狀偵察として性空なる者を遣はすといふ事になつた、性空といふのは佛法の原理で、魔軍討滅には最も力のあるものである、何故かといふに、元來魔、即ち煩惱の根本は我と彼との區別の心から起るので、我も彼も同じものであると信じたなれば、我を愛する如く他を愛し、此を思ふが如くに彼を思ふ、此の自他平等の一念があるならば、何の愛憎があり、何の好惡があらう、然るに個々の身體を區別して、我を愛し他を惡む、此を好み彼を惡む、此の愛憎好惡の我見が一切罪惡の本となつて、我の愛するものは之を得んと欲して、慳貪といふ貪りの心を起し、我の惡むものは之を遠ざけんとして瞋恚の心を生じ、罪に罪を重ね、惡に惡を重ぬるのであるから、佛敎では先づ此の我見を打破するを以て要として人空といふ事を盛んにいうて居る、人空といふのは、我だ我だといふが、此の我といふものは身體と心の寄り集りに過ぎない、此の身體といふものは、地水火風の四つが集つたもので、今日の言葉でいへば元素と元素の集りに過ぎない、偖又心といふものも、眼でものを見、耳で聲を聞き、鼻で香を嗅ぎ、口で味ひ、身で觸れる事を心に受け込むを受といふ、此の受込んだ事に就て樣々に思ふ、想、夫

れが本となつて身を動かし、口を動かし、心を動かして行く所の行、思慮分別する所の識、即ち受、想、行、識の四つ、夫に前の身體を總稱して色といふ、此の五つを五蘊といふ。蘊は積集の義で、色々なものが集まつて成つて居るといふ事である、我といふのは要するに、五蘊の集り、此五蘊を離れて別に我といふものが何所にあるべきものではない、と說くのが小乘經の敎へである、更に一歩進むと此五蘊といふものも實はあるべきものではない、皆是れ因と緣との集合に由つて成るところの假の姿で、因緣を離れて別に物があるのではない、冬枯の時節に、櫻の木を見て、是に花有りやといふか、花なしやといふか、無しといへば、何うして春になつて花が咲くか、有りといふならば、何故今玆に花が見えない、即ち花になるべき因はあるけれども、春風駘蕩の緣が來なければ花は咲かぬ。即ち因と緣との懸合せによつて出來るものに過ぎないのである、といふ工合にいふのを法空の說といふ、人も空なり、法も空なり、本來是空と見て行く、是を性空といふ、此道理を悟つたならば、如何な

る煩惱も、如何なる惡魔も悉く退散せざるを得ないのである、昔僧肇法師といふ人が白刄頭上に下るの時に

四大元無主　五陰本來空　將頭臨白刄　猶似斬春風

というて、四大元主無しといふのは、地水火風の四ッのものが集まつて居るところに別の主人があるのではなく、五陰というたのも五蘊と同じで、此の五蘊も亦集まつて居るので本來空なものである、今白刄を揮つて頭上に加へんとするといへども、猶是春風を斬るやうなものであるといふ偈である、此の事は心經講話に說いた通りで、これが我見を破るの第一であるから、魔軍偵察の任務を此の性空に命じて其狀況を探らせる事とした、果然、其の探偵の報告の結果は、魔軍は我見の總本家たる五蘊山中に屯して、其勢は八萬四千の軍勢を有つて居る、八萬四千といふのは煩惱の多いのをいうたのである、と分つた、既に體勢を知るで、既に敵狀が明らかになつたのであるから、是に應ずる計は一瞬間の中に成る、兵は迅速を貴ぶ、直ちに是に應ずるの計を立てなければならぬ、刹

那といふのは一瞬間といふので、實に僅かな時間の義である。

遂點十八界雄兵、並立體空爲號、人人有無礙之力、箇箇懷勇健之能、直心爲見性之功、一正去百邪之亂、

遂に十八界の雄兵を點じ、並に體空を立てて號と爲す、人々無礙の力あり、個々勇健の能を懷く、直心見性の功を爲し、一正百邪の亂を去る。

さあ彌〻戰爭、十八箇師團の兵は點檢せられた。十八界といふのは吾等の身體の目、耳、鼻、舌、身、意、是を六根といひ、其對境たるもの、色、聲、香、味、觸、法、是を六境といふ、是を認識するの眼識、耳識、鼻識、身識、意識、是を六識といひ、六根、六境、六識を合せて、十八界にしたので、主觀、客觀、切て是等の境界である、既に此十八箇師團の雄兵を點檢して、我見の敵なる體空を以て旗印とした。體空といふの

味方の軍容

は、單に無といふやうな意味でなく、鏡の明らかにして、一點の塵もなく、而も能く萬象の影を宿すが如く、宇宙平等の本體が、其儘に空の姿である、因緣所生の法、是を空といふ、天地萬物は因と緣との組合せで出來て居るものである、是ぞ眞空である、此の空の上に、因緣所生の假の姿が現はれて居るのであるから、一切の現象、是を假といふ、假にして空、空にして假、是眞空妙有といふ、眞は誠の心、妙に有るといふ、眞空妙有なり、是即ち宇宙の本體、其本體の上に現象あり、現象離れて本體なく、本體離れて現象がない、更に言を換へていへば、本體眞空にして、現象は妙有であるから、有にあらず、空にあらず、亦有亦空、非有非空、是即ち宇宙の本體である、今此體空を以て旗印としたのは、魔軍討滅には實に適當なる計である、此眞空妙有の道理を悟れば、何の所にか罪惡の崩すべき、我々は假の有に迷うて彼を愛し、此を憎む、自から自を好み、他を惡む、さりながら天地間の物は平等にして差別、差別にして平等、土瓶茶碗といふ、土瓶は土瓶として、茶碗は茶碗、同じ物

ではないけれども、其本體は同じ土である、土を離れて土瓶なく茶碗はない、其土といふ點から見れば、即ち平等、茶碗は茶碗といふ點から見れば即ち差別、差別にして平等、平等にして差別、是が宇宙の眞理であるのである、今は此眞理を陣頭に掲げて、さうして敵軍に對するのである、されば是等の兵士は皆忠勇義烈にして人々無礙の力あり、個々勇健の能を懷き、誰も彼も皆無礙といふ、自由自在の力を有つて居る、悉く皆勇氣凛々たるの有樣である、眞一文字に敵の陣中に押入つて、佛性徹見の功を立てようとし、其勢ひは即ち一騎當千一正百邪に當る、一つの正義は百の罪惡を破つて行く、即ち白日曈々として東に昇つて百鬼悉く姿をかくすの有樣である。

擐堅固甲、執三昧鏘、智箭、禪弓、光明慧劍、向大乘門中訓練、寂滅山內安營、三明嶺上開旗、八正路邊排布、

堅固の甲を擐し、三昧の鏘を執り、智の箭、禪の弓、光明の慧劍を大乘門中に向つて訓練し、寂滅山內に安營し、三明嶺上の旗を開き、八正路邊に排布し。

さて其日の扮裝はといふと、道心堅固の三昧とて、一心不亂の鏘をとり、智惠の箭を、禪の弓に番へ、大光明、大智惠の劍を大乘門中に向つて訓練した、道心堅固の甲といふのは、若し心が堅固でなければ、外界の誘惑に動かされて、遂に魔軍に降るに至るのである、夫であるから道心を堅固にして、心が動けば迷ひ氣に生ずるのであるから、一心不亂に他目もせぬ、是を三昧といふ、勉强三昧とか、精進三昧といふ、其三昧である、是も梵語で、先づ一心不亂、專心の狀態であると見てよい、智惠は過去現在未來を看破るの智惠で、如何に智惠があつても心が靜かならざれば的が定まらぬ、其所で智惠の矢を禪の弓に番へ、暗を破る光りの如く、智惠を以て煩惱の暗を破るところの劍を大乘佛敎の門中で訓練をして、何れの所に戰場を定めるかといへば、僞惡醜のなき所の寂滅山中に

陣所を構へ、自由自在の作用を現ずる、三明嶺上に義軍の旗を押立てた、三明といふのは、佛の神通力を指したので、宿命明とて、宿世の運命を明らめ、天眼明とて我等の見能はざる所を見、漏盡明とて一切衆生の盡し難き所の煩惱をも滅するの作用で、つまり一切に於て自由自在ならざる所なく、吾等の理想の力、其所に旗を立てたのである、斯くて八方に軍を列ねた、此八方といふのは八正道の事で、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八つである、是即ち迷ひを轉じ悟りに入るところの道として佛の說かれたる即ち道德である、此道德の箇條が八ッあるから其所へ兵を列ねたのである、是が大體の作戰計畫で、是から部分々々に應じて活動を初めるのである。

遣大覺性爲捉生之將、游歷四方、搜求妄想之踪、抄截無明之蹟、復使慈悲王破三毒之塞、忍辱帥伐瞋怒城、精進軍除傲慢之妖、喜捨士捉慳貪之賊、逡巡而魔軍大起、殺氣衝天、

大覺性を遣はして捉生の將と爲し、四方に游歷して、妄想の踪を搜求し、無明の蹟を抄截す、復た慈悲王をして三毒の塞を破り、忍辱の帥をして、瞋怒の城を伐ち、精進の軍をして、傲慢の妖を除き、喜捨の士をして、慳貪の賊を捉へしむ、逡巡して魔軍大に起り、殺氣天を衝く。

大覺性といふのは即ち佛性の事で、是を大將として敵將捕獲の任務を負はしめ、四方に遊歷して、煩惱妄想の逃げ行く踪を探り、無明の蹟を斷切つて、無明煩惱をして連絡の途なからしめ、又一方には慈悲王を遣はして、三毒の城塞を破る、三毒といふのは、貪瞋痴の三ッで、此貪瞋痴の三ッの心は皆慈悲でない事から起る、心に慈悲を懷けば、何の貪る心や、腹立つ心、又愚痴を出すであらうか、夫で是に對するには慈悲王を遣はした、敵の瞋怒の城に向つては、忍辱といふ軍を遣はした、即ち瞋

怒に對しては此忍辱が最も必要なのである、忍辱の心があれば腹を立てるといふことはない『なる勘忍は誰もする、ならぬ勘忍するが勘忍』で、此の勘忍の心があつて如何にしてか腹を立てることが出來ようか、すれば腹立を襲ふには忍辱にましたものはない、敵に傲慢といふ大將が居る、傲慢とは、侮り傲るで、自分ほど世に偉い者はないといふ考へである、自分ほど偉いものはないといふ考へがあれば、勉强する氣も起らず、向上發展する氣もないのである、故に此の傲慢の障害を除くには、精進といふ努力の軍を以て是に向はしめた、夫から慳貪といふ賊を捉ふるには、喜捨とて慈悲慈善の行ひ、此慈悲の行ひのある武士をして是に向はしめた、斯くの如く部署を定めた、無明煩惱の城には大覺是に向ひ、三毒の城には慈悲王是に向ひ、瞋怒の城には忍辱、傲慢の城には精進、慳貪の城には喜捨の軍といふ工合に、各自部署を定めて、旗鼓堂々として進んだのであるから、魔軍は暫時逡巡つたが、斯くてはならじと覺悟をしたと見えて、大いに起つて來た、兩軍入れ亂れて戰爭今や酣となつて、殺氣天を衝くの有樣となつた、其所で、

臣乃部領摩訶、一時齊入、當爾之時、眼不觀色、耳不聽聲、鼻不嗅香、舌不了味、身不受觸、意不攀緣、一志向前、念念不退、

臣乃ち摩訶を部領し、一時に齊しく入る、爾の時に當つて、眼に色を觀ず、耳に聲を聽かず、鼻に香を嗅がず、舌、味を了せず、身、觸を受けず、意、攀緣せず、志を一にして向前し、念々退かず。

臣摩訶を部領して、私は摩訶……摩訶は梵語で大といふ、茲では摩訶般若、卽ち絕對智のことである、此絕對智を引率して突貫を試み、猛然として面もふらず敵の重圍の中へ飛込んだ、此時に當つては我もなく、人もなく、眼に色を見ず、耳に聲を聽かず、鼻に香を嗅がず、舌、味はひを知らず、身、觸れず、外界から襲ひ來るものは少しも是に妨げられる事なく、內より妄想の起る事もなく、所謂無念無想、只進むを知つて退

くを知らず、といふ勢ひで行つたのである、是が即ち精神修養の第一要點で、吾等の精神修養も亦た斯くの如きものでなければならぬ、彼の元の大軍が我國に押寄せた時に、北條時宗が無學禪師に向つて、大事到來す、といふと、無學禪師が驀直に進前して回顧する事勿れ、眞直に進んで後を見る事はならぬといはれた、一心不亂で進むといふ事が陣中の敵を打破るの祕訣である、されば石平道人といふ人も『洒落佛法ぬけがら坐禪は何の用にもなるまじきぞ、眼をすえ、齒をかみしめ、かたし眼になりて、むらがる敵の中に、躍り込み、敵の槍先に突立たる覺悟もて修行せよ』というて居る、又劍道の奥儀として傳へられたる歌にも『切結ぶ太刀の下こそ地獄なれ踏込んで見よ其所が極樂』一歩進んで行くところに、其所に天地が大いに開ける所のものがある、是を禪宗の言で『懸崖に手を撤して絶後に二び蘇る』といふ、險しい崖の所へ手を放つて飛降りて、一び死して生を得る勢ひがなければならぬ、此勢ひを以て進んだものであるからして、敵が是に當る事が出來ない。

倏忽而魔軍大敗、六賊全輸、殺戮無邊、掃除蕩盡、生擒妄想、活捉無明、領向涅槃場中、以慧劍斬爲三段、煩惱林當時摧折、人我山化作微塵、癡愛網遭智火焚燒、邪見林被慧風吹竭、

倏忽にして魔軍大に敗れ、六賊全く輸く、殺戮無邊、掃除蕩盡し、妄想を生擒し、無明を活捉し、領して涅槃場中に向つて慧劍を以て斬つて三段と爲す、煩惱の林當時に摧折し、人我の山化して微塵と作る、癡愛の網は智火に遇うて焚燒し、邪見の林は慧風に吹き竭さる。

是が即ち魔軍敗北の狀況で、六賊全く輸けて、我等の本性を無明にしたところの眼耳鼻舌身意の六ッは全く其勢ひを止めて了つて、八萬四千の煩惱は、皆悉く切破られて了つた、殺戮無邊掃除蕩盡して、敵は悉く殺されて了つて、一人も殘るものがないといふ有樣である、所謂全滅の狀

態で、其大將軍であるところの妄想は、生擒にせられて、無明も又生擒になつた、此の大將達は、悉く是を涅槃の城中に引張り出されて、智慧の劒を以て斬つて三段として了つた、煩惱の林は斯くの如くにして摧かれて了ひ、敵が本營として居つた五蘊、即ち人我の山は微塵となつて了つた、敵が味方として居つた所の愚痴愛憎の鐵條網も智惠の火に燒かれて全く盡きて了つた、邪見とて正しからざる智惠、正しからざる見解の林は、智惠の風に吹き去られて了つた、今や魔軍は悉く滅して了つて、殘るものは一人もなくなつた、煩惱の雲全く晴れて眞理の光りは皎々として輝き渡つた。

因茲三明再朗、四智重圓、內外無瑕、廓然淸淨、心王坐懽喜之殿、眞如登解脫之樓、自性遊無碍之堂、三身踞法空之座、從茲法界寧靜、永絕囂塵、共渡生死之河、齊到菩提之岸、魔軍旣退、合具奏聞、

茲に因て三明再び朗らかに、四智重ぬて圓かなり、內外瑕なく、廓然として淸淨なり、心王懽喜の殿に坐して、眞如解脫の樓に登り、自性無碍の堂に遊び、三身法空の座に踞す、これより法界寧靜にして、永く囂塵を絕ち、共に生死の河を渡り、齊しく菩提の岸に到り、魔軍旣に退く、合せて具さに奏聞す。

と結んだ、是は心內が平穩に返つた有樣をいうたのである、三明といふのは、前にいうた、自由自在の力が、一度煩惱の爲めに昧まされたが、今や再び明らかとなり、四智とて佛の智惠、其の狀が恰かも大圓鏡の何物をも映さゞるなきが如く一切萬法が盡く其上に現はれて、而も鏡を汚さゞるが如きに喩へて第一を大圓鏡智といふ、第二を平等性智といふ、是は森羅萬象が差別の姿は樣々あるが、其の本は皆平等一如のものであるといふことを知るの智惠で、前にいうた茶碗と土瓶と異なつて居つても、即ち本は土であるといふことを知る、併し本は土であるが、茶碗は茶碗、土瓶は土瓶、各自其狀を成して居るので、明らかに見分けるのだ、

第三の妙觀察智といふのは、物に應じ、機に從うて、應用自在なのを第四の成所作智といふ、是等は皆吾等の心の中の最も立派な働きであるのだ、夫が一時は煩惱の爲めに缺けて居つたが、今は四ッの智惠が現はれて來た、斯くの如くにして、吾等の心といふものは廓然として清淨なるが故に、心王とて、心の王は歡喜の殿に坐して喜びの御殿に坐つて、眞如といふ道理は、解脫といふ自由自在の樓に登つて、本來清淨にして碍りなき堂にあり、三身というて佛の身、法報應の三身といふ、佛身は法空の座に踞す、法の身、宇宙の眞理、其の者を人格視して法身といひ、其法身の道理を體得したのを報身といふ、夫が衆生濟度の爲に應現したのを應身といふ、詰り佛陀の事である、夫が法空の座に居つて、天下泰平、國土安穩、法界寧靜にして、永く囂塵というて、國境にも塵も起らず、一切衆生皆共に生死の河を渡つて、等しく悟の岸に至り、斯くの如くして魔軍は全く退きました、煩惱は斯くの如くに平らげました、茲で合せて具さに奏聞すと、臣下から天子へ申上げた文にしたのが此の降魔表の大體である、文は極簡單であるが、意味は頗る深い、我等の修養の道程には斯くの如き誘惑もあり、斯くの如き試驗も經なければならぬ、斯くて自から克つの工夫を凝らし、初めて他に克つことが出來る、人間の世の中は一大戰場で、薄志弱行で、自から克つことの出來ぬ者は、到底起つことの出來るものではない、此降魔表を一讀、二讀、三讀し、只だ是を眼で讀まずして、心に讀み、心に讀んで而して其得るところを行へば、簡單なる此の降魔表も、我等の修養に於ては大いに得るところがあると思ふのである。

明治四十年十二月九日印刷
明治四十年十二月十二日發行
明治四十一年一月十六日再版發行
大正三年五月廿五日讓受三版發行

增補通俗心經講話
正價金六拾錢

著作者　加藤熊一郎

發行者　伊東芳次郎
東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者　高橋賢治
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京市牛込區神樂町一丁目　電話番町五三七番　振替東京一七一番　東亞堂書房

不許複製

大尾

○東亞堂出版圖書特約賣捌店

東京神田 東京堂書店
同神田 上田屋
同神田 誠文堂
同神田 勉强堂
同神田 二松堂
同神田 崇文館
同神田 中西屋書店
同神田 有斐閣雜誌店
同日本橋 至誠堂
同日本橋 林平次郎
同日本橋 文林堂
同日本橋 榊原書店
同京橋 目黑書店
同京橋 前川書店
同京橋 北隆館
同京橋 東海堂
同京橋 春祥堂
同本鄉 日本堂
同麻布 森江書店
同本鄉 森江分店
同本鄉 日東堂書店
同小石川 鷄聲堂
同牛込 同文館
同牛込 文影堂

東京芝 岸田書店
同芝 福島屋書店
橫濱市 第一有隣堂
同 第四有隣堂
同 勉强堂
同 弘文堂
神奈川町 第三有隣堂
大阪市 福音社
同 盛文館
京都市 若林書店
同 丸善株式會社
同 松田庄助
同 寶文館
神戶市 寶文館支店
同 川瀨日進堂
名古屋市 川瀨書店
同 小澤百架堂
同 星野文星堂
岡山市 細謹舍
廣島市 友田書店
同 積善館支店
山口町 白銀日新堂
久留米市 菊竹金文堂
熊本市 長崎書店

佐賀市 大坪書店
鹿兒島市 谷村書店
福岡市 積善館支店
同 博文社
大分市 甲斐治平
長野市 西澤書店
松本市 明倫堂
長岡市 目黑書堂
同 覺張書店
新潟市 萬松堂書店
金澤市 宇都宮書店
札幌區 富貴堂書店
同 維新堂
小樽市 左文字書店
同 近江堂書店
秋田市 石川書店
弘前市 今泉書店
青森市 今泉支店
仙臺市 英華堂
同 金港堂
宇都宮市 內山集英堂
朝鮮京城 日韓書房
滿洲大連 大阪屋號書店
臺灣臺南 小出書店

○東亞堂發賣圖書目錄 郵券貳錢御送附あれば 即時贈呈す

加藤咄堂先生譯註

詳註 和譯碧巖錄

袖珍箱入美本 約一千頁
正價壹圓八拾錢 送費拾貳錢

碧巖錄は禪門第一の書也、其文辭の勁抜にして其識見の高邁なる、前に釋迦なく後に達磨なき禪宗の面目躍如として紙面に横溢するは何人も知悉する所なれども、其語の通じ難く其文の解し難きは初學の最も苦む所たり。本書名は譯註と稱すと雖も、其精細なるは實に講義にも過ぎ、原文に添ふるに懇切なる和譯と註解とを以てし且つ總振假名を施して禪語の讀方を明かにし別に『禪語要解』を加へて參考に資したれば、何人も本書を手にせば些毫の困難なく此禪門第一の書を讀破して、容易に神韻縹緲たる禪文學の妙技と、活殺自在なる古德の機鋒とを解することを得べし。求道の士の一粲を待つ。

本書に對する世評の一斑

（讀賣新聞批評）碧巖錄の講義なし或は義解なした書物の數は隨分多いけれども容易に其妙諦を知らしめるとが出來ないので徒らに難義な書物たるに墮してゐる高僧智識と云はれる人の提唱もあるが語つて詳でなく說いて徹底しない爲めに途に野狐禪を作るに過ぎない。元來碧巖錄は讀む書物ではなくして考へる書物である全精神を統一して大閃光を發揮するの工夫を教へ發揮し得たる大閃光を以て我が精神の暗黑世を照らし見るの愉快を與へる書物である咄堂氏其多年の研鑽と蘊蓄とを傾けて之を譯し之を註解し傍訓を施して以て諸人の爲めに解し易く思ひ易からしめた本書一部を机上に置いて看取靜思せば他の講義を見るに及ばず提唱を聽くに及ばず而も附錄に禪語要解が載せてある親切喜ぶべきの書である。

（京城日報批評）碧巖集は古來宗門第一の書として禪宗に於て最珍重する所玄妙なる禪の趣旨は悉く此の書中にありて讀過すべき書に非ず考量すべきの書なり趣味は其の文字にありて本領は語句以外に存す本著は垂示本則、頌、著語等に和訓し難解の文字には註釋を施し初學者に便なり此宗以外の人たりとも一見を要すべき好著なり。

加藤咄堂先生著

增訂 修養論

大判美本六百餘頁
正價貳圓貳拾錢
送費壹圓貳拾錢
（縮刷版）

修養は人生の一大事也。常に心を修養に存するものは向上し、怠る者は必ず墮落せざるを得ず。宜なる哉、近時人格修養を口にする者、日に多きを加ふることや、本書は曩に『冥想論』『人格の養成』等を著して、我が思想界に大反響を惹起せし加藤咄堂先生が、其滿身の心血を濺ぎて完成せられたる苦心の著にして、古今に徹し、東西に亙りて、先哲が修養に關する諸派の學說を討尋し、且つ古來偉人傑士が發奮立志、以て人格向上に努力せし事蹟逸話を引證して更に君が高邁卓犖なる識見の爐鞴に陶冶し、茲に各種の興味深き修養法を鼓吹せられたるもの、之れを小にして居家處世の妙契を悟得すべく、之れを大にしては宇宙人生の大目的に瞑合すべし。吾人が修道の唯一路にして、又人物鍛錬の好南針たり。

本書に對する世評の一斑

〈二二六新報批評〉今日我が國の思想界は紛亂混沌の狀態にして、恰も梅雨の季節淫雨濛々たるが如し、人心また倦怠に流れて活氣なく、淫靡惰弱の弊は日に甚しく、加ふるに傾向近時の文學藝術は更に之を助長するが如き一の刺激すむるの藝術なく、淫猥浮薄なる文學藝術は以て世道人心を益々その極に向つて其手より淫猥なる現人心なるなり、斯くの如き文學藝術は天下の所謂自然主義的駄小說を捨てい、斯くして而も趣味津々、以て誦すべし、以て味ふべ思想を鼓吹し、修養の工風を會得するところあるべし、吾人は流行の青年に歡迎すべきものなり、一なりと信ずるものなり、本書の如き修養書の出でたるは、最も慶賀つて全なる時に、更に模範を示したる大冊子なり、咄堂氏の文流暢にして、なれば讀過一番恰も驟雨晴れたるの晴空の如く、心氣爽然たるを覺えながらおのづから疑を離れしめる時に有益なるものなり。

加藤咄堂先生著

增訂 世態人情論

大判美本六百頁
正價貳圓參拾錢
送費拾貳錢

人は世態を離れて動く能はず、人情を離れて生くる能はず、彼の學窓に在て秀才と稱せられし士の、一度校門を去るや、忽ち社會の落伍者に墮し、就職難に惱む所以の者は、豈活社會の實情と、人心の機微とに通せざるの罪に非ずして何ぞ、本書は即ち加藤先生が、治博なる學識と奇警なる觀察とを經とし、實社會の統計と多趣味なる世界の活史實とを緯とし、痛烈火の如き快筆を以て、古今世態と人情の變遷、地理と人情、生活の意義、生活と世態人情、職業と人情、世態と宗教、宗教と人生男女の問題、世態心理の基礎、群衆心理の應用等に亙り、滔々數萬言、正面より側面より、最も大膽に最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試み、以て處世の妙諦を指示せられたる一大新研究也。世の經世濟民に志ある士、及び生活の一大事に心を潛めらるゝの士は、來つて此活ける處世經典を繙かれよ。

本書に對する世評の一斑

（時事新報批評）著者の言論を蒐集すべき理觀察を試みて論を結ぶ。著者の述作に於ける、常に能く談じ能く議し、材を整へ、資を『咄堂叢書』の一分冊である。先づ世態人情の觀察より始め、其成立や、變遷や、史實や、蒐めて、組織これ至らざるなく、健腕達筆忽地理關係やを說いて後、生活の研究に移りて其意義、食物、住居、金錢等のことを云々し世態人情乃至職業との關係を詮索して、更にるゝ讀みて組漏駄く、杜選のそしり決してあ宗教や、男女問題やに言及し最後に世態の心るを聞かぬ。亦好人の好著とすべきかな。

加藤咄堂先生立案 ◉毎年一回刊行◉

修養日記

中判美裝六百五十頁

正價五拾錢

送費八錢

本日記は從來他日記類の單に一種の備忘錄に過ぎざるに反し、日々豫定と實行との二劃を設け、過去、現在及將來に迄亙りて使用者の行爲を監視し欄外には有益なる和漢洋の金言と、清新なる詩歌文章、偉人傳等を配し何人を問はず、一日記し始むれば終歳廢することの能はざるの興味と實益とを享受せしむ。しかも年一年進んで已まざる本日記は、猛進一番、愈々模範日記の實を完備し、最新の諸規則暦節並に『フランクリン式時間表』『月課豫定表』『功過格』『時間活用表』『讀書日錄』『收支整理表』『救急治療法』『獨逸實業十戒』『ルーズベルト氏自制修養表』等は勿論新に『明治天皇新年御製集』『加藤咄堂先生稿』『日記と修養』『日記の中より』の二大文字、本誌獨得の意匠に成れる『自家暦』『約束悋』及び各種の『理化便覽』等を訂加し、皆倶に他日記の企及すべからざる光彩を放ちて、意志鍛錬人格修養上無二の好指南針たり。

本書に對する世評の一斑

（讀賣新聞批評）大正三年用の日記帳にて内容の整へること數年來年々の改訂を經て實に至れり盡せり明治天皇新年の御製を始め其他の一般的必須の事柄を網羅し、且つ咄堂氏の「靜動二面の修養論」及び「日記の中より」の「ふ趣味ある文章を添へ更に自家暦、月課豫定表、功過格、フランクリン式時間表、寢起表、時間活用表、讀書日錄、收支整理帳、金錢出納表、約束悋、同人錄、先哲年表等は他になき所のものにして、本欄は月初の一頁に東西偉人の肖像を掲げ氣象、風物、今月の傳說、七曜表あり、日々の欄には外的生活と內的生活の豫定實行欄を設け欄外に和歌漢詩或は俳句並に東西の格言を載せたり理想的の日記たるに恥ぢず。

加藤咄堂先生著

人格之養成

大判洋裝百八十頁

正價五拾錢

送費八錢

古來英傑の士の千古に赫々たる偉業を成せし根本を察すれば、盡く是れ其崇高なる人格より發せる馥郁たる芬芳に外ならず。本書は著者が熱烈なる同情の筆を揮つて人格の眞價を闡明し、平凡の人物を化して偉大なる人格たらしむるの要道を示し、人生に於ける修養の極致を道破して、人の人たる道を誨ふ。立論精透、意趣深長、眞に吾人が向上の新福音也。

本書に對する世評の一斑

（報知新聞批評）ブックメーキング術に於て超凡的の才を有せる氏は又しても此著を公にするに至つた其宣言に依ると前著冥想論死生論運命觀等は凡て人格の養成を主眼としたものなさうだ、シテ見ると此は夫等の結論であらうか何等の新說も見出し能はぬのは余の遺憾とする處である然し時節柄何人にも一讀なを要するので附錄の讀書と自然は殊に余の意を得たものである。

（河北新聞批評）本書を分ちて人、人格、養成法の三章に分ち劃め人とは何ぞといふの題を掲げて人性の善惡、人の價値、近世科學の人類觀を擧げて之れが解釋を試み次に人格に論及してその意義、その根底、自我の觀念性格の變換、人格の感化を叙し終りに常識の涵養、趣味の啓發、意志の鍛錬、處世と人格の各項に滲りて人格の養成法を說き附錄として讀書と自然の一篇を添へたり青年學生の修養に資するに足るべし。

加藤咄堂先生著

增補 冥想論 附坐禪論

大判洋裝二百頁　正價五拾錢　送費八錢

興國の氣運大に熟し、國民品性の修養今日より急なるはなし、本書は、著者が該博の識と流麗の筆とを以て、品性修養の根底たる冥想を、各種の方面より論究し、獨坐靜思の快感を說きて、其理論と方法とを詳叙し、進んで禪の宇宙觀人生觀を述べて、膽力養成の法に及ぶ、加ふるに冥想雜感の一篇は、實に君が半生の思想史とも稱すべきものにして、奇想縱橫、趣味滿幅、世の修養に志あるの士本書を讀まば、曉悟する所必ずや大ならむ。

加藤咄堂先生著

文字禪

中判美裝二百三十頁　正價五拾錢　送費六錢

禪は春にして文字は花也、春は花を待て初て其美を示し、禪は文字を待て初て其妙を傳ふ。咄堂先生の文字禪一卷、趣味横溢せる筆を以て洒脫超越せる古德の禪話を拈出し、平易明快の文を以て瓊華燦爛たる先賢の遺訓を釋解し、講話あり、解說あり、逸事あり、感想あり、一讀克く禪機の妙用を體得して、解脫の絕境に逍遙せしむ。養神鍊膽の好文字。

加藤咄堂先生著

增補 雄辯法

大判洋裝二百五十頁　正價七拾錢　送費八錢

加藤咄堂先生の演壇に立つ事、玆に二十餘年、今は先生の大名を耳にする者、倏忽として そが波瀾抑揚に富める縱橫の辯と、莊重にして一種人をして感動せしめずんば已まざるの聲音とを聯想せざる者なし先生の如きは寔に雄辯術の神に入れる者と稱すべし。本書は先生が其多年の實驗と修辭學、聲音學等の原則を基礎として、雄辯法の目的、雄辯法の基礎、思想の整頓、演說の構成、話材の選擇、演說の準備、聲音の表情、態度の心得等に亙り演說、講義、坐談等の要訣を詳述せられたるもの、先生にして雄辯法を說く、以て其尋常の俗書に非ざるを知るべし、苟くも志を當世に存するの士は速かに本書を繙いて、文明的思想表彰術の眞使益を享受し給はんことを。

本書に對する世評の一斑

〈報知新聞批評〉著者は居士佛教家中第一流の雄辯家也本書は修辭學や因明や西洋論理學や著者の經驗を基礎として雄辯法の說明を簡明にして中々面白し書中に一項あり曰く雄辯家たらんと欲せば盛に名士の演說筆記を讀むべしと、著者の言果して眞なるかな況んや斯の雄辯法をや の結論を生ずる譯也布敎傳道に從事せんとする者の如きは差當り一讀すべき好參考書ならんか但し衆議院議員候補者多年の經驗を經たるものは必ず不可讀、當選の曉議員皆蘇張となるべき會期の短きに苦むの虞あり、而しての議事の速記者を泣かしむるの虞あり

〈河北新報批評〉雄辯法の目的、基礎、思想の整頓、演說の構成、話材の選擇、演說の準備、聲音の表情、態度の心得等に別ち著者多年の經驗を經たるところ丁寧懇切、泰西名家の雄辯法を緯として說くところ斯道研究家の參考となるべき點大なるべし。

〈大阪毎日新聞批評〉本書は雄辯法の何たるかを組織的に簡易に說明して先づ其要綱を提示し得たる者なるが其引例の實際的にして興趣深きものゝみを選べる著者の用意は大によし。

〈東京朝日新聞批評〉著者は居士佛教家中第一流の雄辯家也本書は修辭學や因明や西洋論理學や著者の經驗を基礎として雄辯法の說明を簡明にして中々面白し書中に一項あり曰く雄辯家たらんと欲せば盛に名士の演說筆記を讀むべしと、著者の言果して眞なるかな況んや斯の雄辯法をや の結論を生ずる譯也布敎傳道に從事せんとする者の如きは差當り一讀すべき好參考書ならんか但し衆議院議員候補者多年の經驗を經たるものは必ず不可讀、當選の曉議員皆蘇張となるべき會期の短きに苦むの虞あり、而しての議事の速記者を泣かしむるの虞あり

加藤咄堂・先生著

讀書法

大判美本二百九十頁
正價九拾五錢
送費八錢
（並製）正價七拾五錢
（本）送費八錢

本書は著者が多年の經驗と深邃の學殖とを以て、書籍選擇の方針、讀書上の諸利害記憶力の養成法、思索及研究の順序、讀書と作文、外國語自習法等を述べて一々和漢洋の名著を詳擧し、更に先輩が苦學の實例を叙して獨學自修の諸祕訣を說き以て最有効なる勉强法を懇示せるもの天下篤學の士の好指導也。

本書に對する世評の一斑

（東京朝日新聞批評）加藤咄堂書な著はすこと既に數十、其の出る毎に洛陽の紙價をして高からしむる迄には至らずとも數版を重ねて尙ほ足らざるを常とす其の學說以て一世を驚倒する爲なるかといふに、必ずしも然らず其文章以て萬世の範たる爲なるかといふに是亦必ずしも然らず、何を以て果して然るか、咄堂の著書は隨類應導なり、社會各階級の問題を捉ふること頗る敏に、而して其の捉へたる問題に解決を與ふること、頗る明快也、故に學究の著書の如く迂餘ならず、革命家の議論の如く極端ならず、穩健平正、社會の水平準を離れずして能く說き能く論ず、社會の青年が咄堂の著書を愛讀し、以て其の智識慾を充たすは之が爲めなり。

（報知新聞批評）著書濫發の今日讀書に只一の問頭は書籍の選定にあり本著は先人の說に經驗を加へ如何なる書を讀むべきか、如何なる方法を以て讀むべきかに就きて述べ附錄として社會教育論を添ふ學生にとりては好なる著也。

加藤咄堂先生著

提要社會教育論

大判美本全一冊
正價貳拾錢
送費四錢

本書は五十頁の小冊子なりと雖も、全編悉く是れ先生が、該博なる蘊蓄の結晶にして、而かも言々皆自己が積年の驗經を根據とせられたるもの。世人の最も難事とせる社會教育通俗講演の理論方法を詳述して、現時教育の弊竇の在る所を喝破す。經世家の再誦三誦すべき好文字也。

加藤咄堂先生著

運命論

大判洋裝美本
全一冊

……近刊……
……印刷中……

加藤咄堂先生著

禪學觀

大判洋裝二百五十頁
正價七拾五錢
送費八錢

禪は果して不立文字の敎なるか、禪は果して言說を以て傳ふべからざるか。否、斯くの如きは、蓋し行文用字の自在を得ざりし舊時代の一謬見のみ。本書は加藤咄堂大居士が、該博深淵なる大達識と、犀利明快なる批評眼とを以て、哲學、宗敎、心理、倫理、文藝、衞生、武道、處世等の各方面より、前後縱橫に禪の眞相を觀察し禪機の妙用、練膽、養心の工夫、坐禪の形式及方法、禪と道德、禪と文學藝術と劒道、坐禪と衞生、禪と人格修養等に亙り、大膽にして警拔なる科學的解剖を試み古來幽玄難解の稱ある禪學の眞髓を剔抉して、見性悟道の一大事を解決すること、吹毛の劒を揮つて枯葉を斷つが如き感あらしむ、生死の關係を透脫して、與奪縱橫、活殺自在の大勇猛心を鍛錬せんと欲するの士は乞ふ刮目を開て此活書を讀め。

本書に對する世評の一斑

（新修養批評）本書は禪の要義より說き起して教理に及び、更に禪の工夫を述べ、次で禪と道德、禪と文藝、禪と武道、禪と人格との關係を論ずること詳密を極む、假令禪の何物たるかを知らざるものと雖も、本書を一讀すれば優に其堂奧に達すること疑を容れざるべし殊に本書の特色は難解難入の教理を談ずるにあらずして、通俗平易の裡本書を藉りて修養の人たらしめ、處世の術を教ふるに意を注れたるものゝ如し、されば卷中多くの例話を擧げて說明の料としたるが如き、略ぼ其用意のある所を窺ふに足る。

（新公論批評）現今の雄辯家にして又能文家、いはゆる口も八丁手も八丁の人は本書の著者なり、この人にして初めて口に述ぶる能はず文字以上の文字に寫す能はず、文字以上の文字、言說以上の言說たる禪學の玄を闡くべきか。編輯の排列順序等馴れたるものにて些の混亂無く行文努めて平易にして詩趣を離れす、著者獨特の文章は一讀卷を措く能はざらしめ讀者を魅せずんばやまず、禪楊を訪ねて清風に嘯かん人この書を携へざる可らず。

加藤咄堂先生著

運命觀

大判洋裝美本
全一冊
正價五拾錢
送費六錢

人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せらる抑運命とは何ぞや本書は著者が斬新なる論を以て舊運命觀を擊破し世界各民族の運命に關する風習を擧げ更に深遠なる哲學科學の眞理により新運命觀を建設して個人國家社會の運命を論じ終りに人生の眞趣を解してこれが開拓策を說き此運命と奮鬪して成功の位地に達せるの實例を示す讀め浮世の波に漂へるの士來れ開運の鍵を得んとするの徒本書は成功の秘訣なり開運の守符なり。

加藤咄堂先生著

增補 死生觀

大判洋裝美本
全一冊
正價六拾錢
送費八錢

死生は人生の一大事實にして千古未解の問題たり本書は古來哲人の精到なる思索と英雄豪傑が決死の覺悟とに照し學說と事實との兩方面よりこの問題を解決したるものにして議論穩健文章明晰大に江湖の喝采を博し茲に第十五版を發行するに當り更に死生雜話數十題を加へ其遺を補ひ本問題を論明せんとす乞ふ一本を購うて此千古未解の問題を決せよ。

加藤咄堂先生著

修養資料 はなし草

中判美装二百二十頁
正價四拾錢
送費六錢

此書篇を分つこと五『雨窓閑話』は細雨霏々、書窓晝靜かにして香煙濃かなる處、古今東西の史乘に現はれたる逸話奇聞を談じて興趣津々時の移るを覺えざらしめ『文談武談』は文武兩道に亙りて古來偉人英傑の慷慨悲壯なる美談を集め『夜雨蕭々錄』は奇絶怪絶なる幽靈及び妖怪に關する事實を語りて、附するに先生が一家の幽靈觀を以てし、理外の理の決して輕卒に否定すべからざるを詳論して、一讀悚然、熱時尚ほ肌に粟を生ずるを禁ずる能はず。若し夫れ『茶榻禪話』に到ては、著者が獨特の擅場、浩蕩洒脫なる超越的生涯を叙して、松風蘿月の境遙かに寰塵擾々の聲を絶ち、繙讀一番涼風腋下に生ずるの思ひあらむ『修身敎材』は吾人が以て日常修養の範たるべき佳言善行を錄して、克己反省の餘師たらしむ。文章、演說、修身講話等の材料として、將又社交の談柄として、娛樂の裡に敎訓を與へ、談笑の間に天來の氣呵に觸れしむるもの、眞に袖中の清涼劑たるに背かず。

本書に對する世評の一斑

（大阪毎日新聞批評）本書は著者年來和漢洋の書籍中より手記し置ける逸事逸聞中より面白きもの長短併せて百十數話を選集せるものなり中には有觸れたるものも多けれど日常談話の材料として面白きものも少なからず。

（河北新報批評）故老の談に聞き新刊の書に見たる東西の逸事逸聞を蒐めて一卷となせるものにして依りて少年諸君が淸閑の話材を得るの外何物か得る所あるべきは勿論なり。

（報知新聞批評）雨窓閑話、文談武談、夜雨蕭々錄、茶榻禪話、修身敎材の數項に分ちて古今東西の奇談佳話など集めたるもの、はなし草の名に負かず。

加藤咄堂先生著

冥想雜感 朝思暮想錄

中判美本
全一冊三百餘頁
正價七拾錢
送費六錢

朝に思ひ、暮に想ふ。朝に思ふの時には希望の微笑あり、暮に想ふの時、誰か追悔の涙なからむ。本書は咄堂先生が、深刻なる同情と、高遠なる理想とを寓して、吾人が修養處世の妙諦を指示せられたる隨想隨感錄にして、其詞藻の瑰麗なるは、燦として百花の芳を競へるが如く、之を文章修辭の模範と稱すとも亦溢美にあらず。苟も文を談じ、修養を口にするの士は、必ず一本を缺くべからず。

本書に對する世評の一斑

（新公論批評）俚語片語世道かたけ、朝思暮想人心を寫す、著書此の如きは眞に喜に堪へたり、吾友咄堂國を憂ふること深し、之れ南條博士の著者に寄せたる詩之に依つて本書の眞價を知るべし、本書一度發賣禁止の厄に遇ひ、訂正改版漸く世に出づるを許されたるも、著者序していふ、江湖落拓二十餘年、朝暮に思想する處と。

（萬朝報批評）著者、文壇に生活すること十八年、朝の冥想、暮の感想、積りて終にこの卷を成す、或は神靈幽玄の哲理を談じ、或は社會人事の俗を說く、蓋し、隨感隨錄なり一篇の要旨は、窮理達道と修養處世の妙諦を說示する者なり。

（大阪毎日新聞批評）瀟洒たる裝釘の小本は著者が嘗て時に應じて筆を執り機に臨みて說を立てたる數年來の隨筆二十有餘編を蒐めたるものにして文學、社會宗敎、哲學の各方面に氏一家の機杼を遠慮なく發揮して無作法に批評し去れるところ甚だ面白し其文人を魅するの情趣に乏しと雖も鍛へ込みたる多年老練の筆致は流石に人を飽かしめざるなり。

巖谷小波先生　加藤咄堂先生共編

通俗講演

常識大觀

大判箱入美本
九百九十餘頁
正價參圓八拾錢
送費拾六錢

時代は刻々に推移し、常識は年々に進轉す。昨日の常識は既に今日の朽識にして、今年の新思想は最早翌年の旧思想たらざるを得ず。世人若し、新智識の吸收を怠ること一日ならば、忽ち時代の進運に遅るゝこと、實に一月の差のみにあらざるを得ず。本書は、現代のあらゆる有要なる諸智識を網羅せる言文一致の最新百科全書とも稱すべく、通俗教育に經驗厚き、巖谷、加藤の兩先生が豐富なる多年の蘊蓄を傾倒し、古今未曾有の新案を以て津々たる興味の中に、新時代の新常識を洩らさず養成せしむるの一大設備を藏し、一は又中小學校教職各位演說家、講師諸賢が一年三百餘日取つて以て直ちに日々の講壇上の活材とすべき趣味と實益とを兼備せる新資料を提供し、更に一々其應用上の諸注意を附記し、又別に卷末に五十音索引を添へて、百般の疑問を檢出すること、叢中の物を探ぐるが如からしめたる便益無比の大著にして、收むる所、物理、化學、生物學、進化論、動物、植物、昆虫、黴菌學、鑛物、地質、天文、氣象、地理、地文、歷史、傳記、政治、經濟、工業、農業、林學、園藝、軍事、交通、機械、生理、衛生、心理、倫理、文學、哲學等の諸學に亙り、大小五十餘個の密畫圖版を挿入して、鋭切明快、說明の到らざる隈なき、宛ら麻姑を儆うて痒きを搔くの感あらしむ、講演上の人たると、一般人士たるとを問はず卽刻一本を備へよ。

本書に對する世評の一斑

（やまと新聞批評）國家の發達は之を國民の發達に待ち國民の發達は之を其の常識の發達に待たざるべからず本書は卽ち國民をして常識を涵養せしむる講話の資料として著はされたる者にして最も通俗にして且つ趣味深き材料を多く蒐集し就中歷史と科學との記述に一層の注意を拂ひあり篇を十二ヶ月に分ち各月二十五題を選び動植物等には鮮明なる挿畫を用ひ各話題の冒頭には夫れ〳〵備考欄を設けて說明の場所、用意其他に就ての注意を示し解說頗る平易懇切且つ其要を得たり、一般社會、學校、家庭に於る講話講演の資料として有益なるべきは勿論普通の讀物としても此書一卷、時勢に伴隨する常識を養ふに餘りありといふべし創業滿十年記念出版の一に係る

加藤咄堂先生　大住嘯風先生共著

常識之基礎

大判美本六百餘頁
正價貳圓
送費拾貳錢

本書は吾人が居常痛切に必要を感ずる常識の如何なるものたるかを具體的に說述して精神物質の兩界に亙り形而上學形而下學の各科を網羅すること實に貳拾有五、系を逐ひ統を辿り行文流麗首尾整然一讀卷を措く能はざるの趣味あるのみならず天地間亦一物も知らざる莫きの識見を生ぜしむ當に是れ通讀すべき形式に改善せられたる新百科辭典也。

本書に對する世評の一斑

（東京朝日新聞批評）常識の基礎とは面白き名なり試に取て之を讀むにまことに面白き書也蓋し面白しとは小說若しくは娛樂的雜誌を讀むの類の面白味には非ず、然らば如何、先づ其着眼が面白し次に其の排列が面白し更にまた讀者の心理を巧に應用して倦怠なく讀了せしめんとしたる用意が面白し又石井柏亭氏の筆に成れる數葉の挿畫の精緻なるが面白し何放言に於て明かに俗識なる常識の基礎と命じたるは其の緒言に於て明かに俗識なる常識を養成せしめんに所宜に地球、人類、社會に亙り編中含論なるに本書は俗識を起し生物、趙勢、只其の說故に本書は近に筆を原宇宙に終に我が周邊の一切を通じて誰人の讀物としても適し重寶此上及ぶべく其の說故に世學を起し物、趙勢、只其の說故に本書は近に筆を原宇宙に終に我が周邊の一切を通じて誰人の讀物としても適し重寶此上ざる所は倫理、衛生、現代、社會、文藝、宗教等の方面のみ、行文簡明一讀要領を取得するに苦しまざるべく、且つ卷尾に索引を附して百般の疑問を此書中より操り出すに供したるは殊に便利なり紹介子は著者が刻學者及び晩學者の利益なり紹介子は著者が刻學者及び晩學者の無味に終らんとする此種の叙述を其の一見地より生かし興味と併行して尊々教へたる其の親切と其の時勢に着眼とを多とす。

（萬朝報批評）今日の時勢は是あらざるべからずして未だあらざりしの書なり、咄堂の佛案なりと云、現代の人として必ず有する知識を總じて供給したるなり、全書を要する篇、地球篇、生物篇、人類篇、社會篇の五篇分ち大冊なれども文流麗にして自らの宇宙に我が周邊の一切を知了するを得て讀過せしめ、趙代會ふべく其の說故に世學を起し物、趙勢、只其の說故に本書は近に筆を原宇宙に終に我が周邊の一切を通じて誰人の讀物としても適し重寶此上無し。

澤庵禪師細鈔　森大狂居士嚴訂

澤庵禪師　老子講話

大判美本三百二十頁
正價壹圓參拾錢
送費拾貳錢

老子の一書、言々宇宙の祕を闡き、句々人情の微を穿ち、幽玄高妙眞に東洋思想界の珍たり。孔子曾て評して云ふ『老子猶ほ龍の如き乎』と。本書は龍の如き老子の敎訓を、禪門近世の大德澤庵禪師が卓拔の見を以て平易簡明に和解せられたる希籍にして、禪の妙と老子の玄と、相迸發して龍の雲を得たるが如く、眞に雷電を叱咤し乾坤を呑吐するの感あり。人事紛々俗務蝟集の中に沒頭するの士一たび本書を繙かば、神韻縹緲として心胸自ら快濶なるを得む。加之今附するに禪師が柳生但馬守に與へて禪劍二道の極意を懇示したる、祕書『太阿記』を以てす。俱に精神鍛錬の絕好鉗鎚。

本書に對する世評の一斑

（やまと新聞批評）本書は素と眞禪中の眞禪たる澤庵禪師の手鈔に係り萬松文庫の祕書たりしも禪師歸寂以來二百餘年未だ曾て上梓せざる事無き眞に稀世の珍本たり蓋し老子の書たるに苦深遠にして幽一玄大儒倘ほ且つ之れを闡いて些子兒のめ疑滯なく喝克く其の祕奧を以て老子を知るべきなり解すべく太阿記は古今獨歩の劍士柳生宗矩の爲めに作り且つ自ら抄を書きたりといふ「太阿記」を附したるもの講解は平易簡明にして叮嚀親切なれば何人にも了解し易く、本文の次に「訓」を附したるは參訂者の用意周到なるを見る但だ「講」の下に附記せる「補註」はあらずもがなに思はる。卷尾澤庵禪師が柳生宗矩の爲めに作り且つ自ら抄を書きたりといふ「太阿記」を附したるは兩つながら親切を極め製本亦其の体を得たり。

（日本及日本人批評）近世禪門の大德澤庵禪師の遺著老子鈔に譯文を附し補註を加へたるもの講解は平易簡明にして叮嚀親切なれば何人にも了解し易く、本文の次に「訓」を附したるは參訂者の用意周到なるを見る但だ「講」の下に附記せる「補註」はあらずもがなに思はる。卷尾澤庵禪師が柳生宗矩の爲めに作り且つ自ら抄を書きたりといふ「太阿記」を附したるは兩つながら親切を極め製本亦其の体を得たり。

東京開成中學校
國語漢文科講師　佐藤仁之助先生著

速成應用　漢學捷徑

箱入美本四百五十頁
正價壹圓貳拾錢
送費拾貳錢

本書は著者が多年苦心の結果、克く浩瀚なる漢學の精髓を壓搾して、漢學の意義及沿革、漢學の形成、音韻の原理、字書の應用法、漢文解讀法、歷史子集の解題、作詩法、作文法等に亙り、懇切詳細なる說明を施し、最少の時間と勞力とを以て、一覽直に儒學、漢文學、東洋哲學等の要領と、漢學修養法の祕奧に通ぜしむる未曾有の新案辭典にして、附するに『故事成語要解』『和漢名數』數千項を以てし、全部細字密行に組みて、單に之れのみを以てするも優に一大熟語辭典に匹敵するの實質を具有せしめ、且つ卷首卷末には、極て綿密なる五十音索引、分類索引を設けて讀書家作文家兩樣の利便に供し、一書にして漢學研究の全科目を網羅し、以て何人にても自在に漢文を讀作し得べきやう按排せる、空前絕後の至便參考書也。

本書に對する世評の一斑

（新公論批評）現今の日本文明は四十年以來輸入された西洋文明に負ふ所大なるは言ふまでもないが、千年來養成せられた漢學の要素が又其の重なる基礎となつて居る事は明白なる事實である。漢學を知らずして日本の文明を語るべからずとは是れ我國の現狀である。乍併漢學は其の門に入る事は頗る困難であつて初學者の常に苦痛とする所である。然るに本書は平易なる日本文を以て是れが手引きたるに勉めて居る、漢文の何んなものか乃至は其の讀法譯法作法等を知り捷徑により速成的に漢學に通ぜんと欲するものの爲めには眞敎書である。

文學士 白河鯉洋先生著	■孔子	大判美本 四百十頁	正價壹圓貳拾錢 送費拾貳錢	
澁江保先生纂譯	■ソクラテス論語	袖珍美裝 三百九十頁	正價七拾五錢 送費六錢	
福本日南先生著	■英雄論	大判美本 二百五十頁	正價壹圓 送費八錢	
境野黃洋先生著	■法、華物語	大判美本 全一册	正價八拾五錢 送費八錢	
遠藤文學博士序 祥雲文學士校訂	■荻生徂來論語辨	新形美本 四百七十頁	正價五拾錢 送費六錢	
加藤咄堂先生編	■國民教育資料大鑑	近刊	印刷中	
山路愛山先生譯	■譯文大日本野史	近刊	印刷中	
山路愛山先生著	■支那史要	近刊	印刷中	
加藤咄堂先生著	■運命論	近刊	印刷中	

文學士 栗原古城先生譯	■カーライル英雄研究	箱入美裝 六百頁	正價壹圓七拾錢 送費拾貳錢	
文學士 栗原古城先生譯	■エマソン偉人論講話	箱入美裝 五百二十頁	正價壹圓六拾錢 送費拾貳錢	
文學士 煙山專太郎先生著	■英雄豪傑論	大判美裝 四百廿頁	正價壹圓六拾錢 送費拾貳錢	
破魔禪居士著	■偉人修養史	大判洋裝 二百十頁	正價六拾錢 送費八錢	
德富蘇峯先生序 鹽見戈山先生著	■修養逸話偉人の風化	中判美本 二百七十頁	正價五拾錢 送費六錢	
西鄕南洲翁手抄 臼田石楠先生講述	■西鄕南洲言志錄講話(全)	袖珍美裝 二百七十餘頁	正價六拾錢 送費六錢	
野靜軒先生遺著 足立栗園先生譯註	■修養清話沈靜錄(前篇)	袖珍美裝 三百六十頁	正價六拾錢 送費六錢	
野靜軒先生遺著 足立栗園先生譯註	■修養清話沈靜錄(後篇)	袖珍美裝 四百五十頁	正價六拾錢 送費六錢	
貝原益軒先生遺著 足立栗園先生校註	■譯註愼思錄	袖珍美裝 三百六十餘頁	正價六拾錢 送費六錢	

福本日南先生序 小川柳坡先生著	■支那及支那人	大判洋裝 二百廿頁	正價八拾錢 送費八錢
町田柳塘僊史著	■訂正漢詩講話	袖珍美本 二百五十頁	正價五拾錢 送費六錢
鹿野千代夫先生編	■乃木大將言行錄	大判美本 五百頁	正價壹圓五拾錢 送費拾貳錢
加藤敎榮先生編	■諸名家の見たる乃木大將觀	大判美裝 百七十餘頁	正價六拾錢 送費六錢
碧瑠璃園先生著	■山鹿素行	大判洋裝 全一冊	正價八拾錢 送費八錢
碧瑠璃園先生著	■由比正雪	大判洋裝 三百五十餘頁	正價壹圓拾錢 送費八錢
碧瑠璃園先生著	■由比正雪（後編）	大判洋裝 三百九十餘頁	正價壹圓參拾錢 送費八錢
佐藤　正先生著	■日本人長所短所論	大判美裝 全一冊	正價壹圓四拾錢 送費拾貳錢
佐藤仁之助先生著	■國語漢文要語詳解	特製合本 全一冊	正價壹圓 送費拾貳錢

324
591

終